
東方菓子伝

最低最速烏天狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方菓子伝

【Nコード】

N6529Q

【作者名】

最低最速烏天狗

【あらすじ】

ひよんな事で東方世界に来てしまった主人公のイブキ。ドタバタしながらも彼女は夢に描く自分の菓子屋を目指し、彼女は世界にお菓子を広めるそんな物語。

第一話 知らないところ（前書き）

在りがちな始まり方

第一話 知らないところ

気が付くとそこは、ジャングルでした。

って、おかしいわよ!?

さっきまで、私はマイホーム兼私の夢のお菓子屋さんに買出しから帰る途中だったのよ!?

そ・れ・が・な・ん・で!

「ジャングルにいるのよおおおおお!!!」

お、落ち着くのよ、私。

そして考えるのよ、どうして私がここにいるのかを!

どんな事にも原因が有って結果が有るってどっかの偉い人も言ってたじゃない。

まずは、私の行動を思い返すのよ。

借金までして建てた私の夢に描いていたお菓子屋さんで足りない物があつたから買出しに出る↓必要な物を買って店を出る↓オープンまでにどんな事をすればいいか考えながら帰る↓“トン”と背中を押された感じがした↓そこはジャングルでした♪

原因と言えるのが背中を押されたぐらいしか思い当たらない。

何で背中を押されただけでジャングルにいるのよ!

訳分かんない!

「何で、何で、私がこんな目に遭わなきゃいけないのよ……」

やばい、泣きそう。

「外国にまで行ってお菓子作りの勉強までして、頑張って頑張っていっぱい頑張って一流のパテシエに……ぐす……なって、日本に……ひっく……帰って来て……ぐす……しゃ、借金までして……ひっく……建てたのに……ぐす……何でこんな所にいるの……」

・
・
・

暫くの間泣き続けてやっと気分が落ち着いてきた。

「とりあえず、人探さなきゃ。そして日本に帰るんだ。」

決意を新たに一步を踏み出そうとした瞬間。

“ズシン”

後ろから何か重たい何かが歩くような音がした。

とてつもなく嫌な予感がして振り返ると

「グルルルルルル…」

きよ、恐竜？絶滅してるはずだよね？しかもコレ、ティラノサウルスって言う肉食の恐竜なんじゃないかな？

「あ、あははははははは……」

人間余りにも怖いと笑い出しちゃうんだ。

[illegible]

「来たー！来たー！来たー！来たー！来たー！」

鳴き声とは思えない、もう音よ、音。

反射的に逃げ出したけど絶対に食べられちゃう、食べられちゃう!!

「私は食べても美味しくな——い!!!」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

木が沢山生えている所を全力で走る、走る。

木？なにそれ美味しいの？といわんばかりにバキバキ折りな

がら私を追い掛けて来る。

というより私こんなに早く走れたっけ!?

木を障害物にして走ってはいるけど恐竜に追いつかれないっていく

「なんでも私の体おかしいんじゃない!？」

“ガツ”

「イタ！」

何かに躓いてこけてしまった、まずい、早く立って逃げなきゃ、も

うアレは近くに来てる、食べられる、死にたくない、死ぬのは、嫌
！！
気がつくと思竜が倒れていた。

第一話 知らないところ（後書き）

短い！

第二話 私は生きてます（前書き）

しょうこりもなく始めます

第二話 私は生きてます

恐竜との鬼ごっこから、早一ヶ月ぐらい。

私は何とか生きてます。

あの鬼ごっここの後に分かったことだけど、何だか私人間じゃないっぽい。

あと外見が変わってた。

前の体型は合法ロリータ、チビ、貧乳、童顔、子供っぽい声、何処に行っても“お嬢ちゃんどうしたんだい？”って聞かれていた私が、今ではスレンダーボディ、美乳、大人な顔、恐れ入ったか！……虚しい、人に会いたい居そうにないけど。

話を戻すけど人間じゃないっぽいって言うのは百メートルぐらいを一息で走り抜けたり、ジャンプしただけでそこら辺の木を飛び越したり、恐竜を殴り飛ばしたり出来たから。

その結論から人間じゃないっぽい。

最近では私の中に妙な感覚を感じられるようになってきた。

モヤモヤしてるけど私の力だと言う事は何故か分かる。

「今は力を使えるようにならずに生きていけない」

使えるものは何だって使って生存率を高めなくちゃ。

私の中にあるモヤモヤを右手に“あつまれあつまれ”って念じてみた。

「何だか拍子抜けするぐらい簡単に出来たわね。」

淡く光ってる私の右手を見て思った、アニメや漫画みたいにこれを球体に出来ないかな？

結果、簡単に出来た。

・
・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

あれから大体一年ぐらい。

私も大分成長した、力を使って火を出したり、狩りをしたり、空を飛んだり、空を飛んだり、空を飛んだり（大事な事なので三回言いました）。

もう私にはこちら辺で恐い者などいない、恐竜なんて返り討ちにしてお美味しく頂きます。

また最近になって私の固有能力が判明した、その名も『ありとあらゆるものを複製する程度の能力』という能力。

いやいやいや、『○○○程度の能力』って東方の世界かっての。

そう考えると、人なんて居そうにないここに存在している私って、突発的に生まれた妖精か妖怪か神のどれかになるけど、神っぽくないし、妖精っぽくもないから、私ってば妖怪？

そもそも人間なんて居ないのに妖怪や神は生まれたりしないでしょ：妖精は分からないけど。

第三話 イベント発生（前書き）

なんか・・・無理やり感が・・・そして短い

第三話 イベント発生

やあ、皆元気にしてた。

もちろん私は元気よ。

軽く一万年ほど恐竜達と戯れてるわ。

ここに来てから特にコレって事は起きてないわ。

あ、そうそう数百年前にこの世界の創造神って言うのが現れたわね。
ここで私の誕生秘話よ！

なんと、その創造神のストレスと不安感所謂負の感情ね、から私は
生まれたらしい。

そして私のカデゴリは妖怪らしいのよ。

それはさておき

今私は恐竜時代最後の一大イベントを体験しているわ。
大量の隕石が降ってきてます。

絶望とは思えない、コレなんてムリゲー。

「私の所にも降ってきたー！？だ、弾幕！弾幕！」

大岩ぐらいの弾幕を隕石に向けて打ち続ける。

隕石は弾幕を二、三発当てると碎けるけど数が多すぎる。

「ええい、まどろっこしい！極マスターパーク！」

私が考えたマスタースパークを更に超えたであろう極マスターパ
ーク。

隕石群なんて目じゃないわ！

私に向かって落ちてきていた隕石群は跡形も無く消えていた、あた
いってば、さいきょー！なんちゃって。

“ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ”

「へ？何って！津波ー！ー！！！」

私に出せる最高速度で空を上に乗って津波を何とか避ける事が出来
た。

今のうちに能力で消費した妖力を複製して回復、回復。

さてと、恐竜時代も終わってこれから環境が激変するだろうけど、
どう生活しようかしら？

第四話 長かった

長かった、非常に長かった。

皆、やっと知能を持った人が現れたわ（簡単な道具を使う程度の）。
ひたすらに待つことウン千万年。

色々辛かったわ。

前の知識はかなり抜け落ちたけどお菓子作りの知識技能はしっかりと残ってるわ。

このウン千万年、あまりにも退屈だったからお菓子を作って過ごしてたわ。

なに？道具が無いって、そんな物頑張って作ったわよ。

初めは石とかを削ってたけど、鉄鉱石っぽい石を見つけてからは妖力で業火を出して溶かしてから作ってたわ。

無駄に要らない技術が付いたわね。

そうそう、それと百年に一度ぐらいで創造神のクロウが会いに来たりしてあまり寂しくなかったわね。

クロウと言えばそろそろ来る時期だと思っただけだな。

私はクロウと会うのを密かに楽しみにしているのよね、何て言ってるって会話が出来るのよ！

早く来ないかな

・
・
・
・
・
・
・

数十日ぐらいしてクロウがきた。

「久しいな“イブキ”」

「そうね。久しぶり、クロウ」

クロウがイブキって言ってるけど私の名前ね。

クロウは白の衣を着て短髪で金髪、蒼眼の顔はちょっとカッコイイ奴ね。

私に対等に接する少し変わったおかしな創造神。

「それでこちらに何か変化は無かったか？」

「あったわよ。人類の原型がチラホラと現れる様になったわ」

クロウと話して居る所は大樹の枝に作った私の自宅、建築技術が無くたってウン千万年生きてれば作れるわよ。

「そうか、なら良かった。正直不安だったんだ、人が生まれるかどうか」

「昔からそうよねクロウは、少しは自分の行動に自信を持ちなさいって、何かおかしかったらそっちでも分かるんでしょ」

「それもそうだがやっぱり不安なんだ。」

「もう、クロウったら。愚痴ぐらいだったらいくらでも聞いてあげるから話さない」

近状報告をしてからクロウの愚痴や悩みを聞くのが私の役目みたいになってるわよね。

面白いからいいけど

・
・
・
・

「ありがとうイブキ、楽しかったよ」

「どういたしまして、かしら」

来た時よりもいくらか明るくなっているクロウ。

「これから調整で忙しくなるだろうから、もうイブキの所へあまりこれないだろうな」

「そうなの？それは寂しくなるわね。」

「それじゃあな」

「またね」

軽い別れの挨拶をしてからクロウは創造神界に帰っていった。

キャラクター設定

イブキ

種族 妖怪

性別 女

能力 ありとあらゆるものを複製する程度の能力。

外見 身長170ぐらいでスレンダー体型、胸は小さくも無く大きくもない形の整った美乳。

髪は黒髪で腰ぐらいまである、目の色は黒で典型的な日本人タイプ。

服装は黒を基調としたドレス風の洋服、スカートの丈は膝した辺り。

趣味 お菓子作り

好きなもの 可愛いもの、お菓子、平穏
嫌いなもの 虫全般、争い事

この物語の主人公、折角自分の店を持ったのに、気が付いたら知らないところに居た上に姿が変わり人間じゃなくなった哀れな人。だけど、めげずに菓子屋を目指す、取り合えず人が生まれるまで待とう。

クロウ

種族 創造神

性別 男

外見 白い衣を着た、青年風のイケメン、短髪で金髪、蒼眼

イブキが来る切っ掛けを作った人、他の創造神からのプレッシャーと初めての世界創造による不安からのストレスで、イブキの体が出て他の創造神の世界からイブキを呼び寄せてしまった小心者。イブキに会いに来ては愚痴を聞いて貰ってストレスの発散をしている。

そして先の出番が余り期待できない神。

第四話 長かった（後書き）

四話目にしてやっと主人公の名前が出るって遅いですか？
では、次話で

第五話 文明の始まり（前書き）

内容が薄いかな？

第五話 文明の始まり

イブキです。

皆元気がしら、クロウが来なくなつて数万年ぐらかしらね。

私の気分は右肩下がりのよ。

はあ、クロウに会いたいな、ほんと寂しいじゃない。

友達なんだから千年、いや五千年に一回ぐらいは会いに来なさいよ。とりあえず、この話しはもう止めとくわ、永遠と愚痴ってそうだから。

さてと、環境がどう変化したか教えてあげなきゃね。

と、その前に私が何処に住んでるか教えるわ。

かなり上空を飛んで、恐らく日本になるだろう大陸の真ん中当たりを下りて、近くにあった森の奥に家というより小屋を建ててそこに住んでるわ。

それで丁度森を抜けた近くには、小さな集落が在ったからその人達をここに住んでから、今までずっと観察してきたわ（今は村ぐらかしら）。

そしてやっと、やっと、やっと…人類が文明を築き始めたわ。

お姉さん感動の余り泣いてしまったわよ。

長年妖怪やっててこんな感動したのは始めてかも。

妖怪って言うって思い出したけど最近、私以外の妖気を感じるようになってきてるのよねえ。

この村が私以外の妖怪に襲われなきゃいいけど…
もし襲われたら私が懲らしめてあげなきゃ。

・
・
・
・
・

・ ・ ・ ・ ・
数百年ぐらいかな？

「よく頑張ったな！カヤ！俺達の娘だ！」

「ありがとう、シン…名前、この子の名前はユンよ」

「ユン、いい名前だ。今日からお前はユンだ！我が娘！」

中規模程度まで成長した村に隠匿術を使って、そろそろ出産しそうだったカヤ夫婦を見守っていた。

…やっぱり人が子を産む光景は神秘的よね。

カヤちゃんもシン君もこの前までヨチヨチ歩きだったのに、今じゃお父さんとお母さんか。

カヤちゃん、シン君、何かあったら私が影から助けてあげるね。

シン君の家を出て村を歩く。

この村も随分と変わったわね。

森に住み始めた時は小さな集落だったのに今では、立派な村に変わって。

村の周りには獣が入れないように丸太で作った塀がぐるりと囲っている。

「おい、聞いたか。カイ」

「？何をだ。コウ」

「風の噂で聞いたんだが、何でも山を二つほど越えた先にある村が、火を操る角の生えた大男に襲われたらしい」

「山二つ越えた先の村の噂話だろ？俺達には関係ない話だ。さっさと畑耕しに行くぞ」

「ちよっ、待ってくれよ！コウ！」

カイ君とコウ君の話聞いたけど、角の生えた大男…鬼なのかしら、しかも能力持ちの。

これは何かしらの対策取っておかなきゃ、妖怪にとって山を越える事なんて造作も無いことだし。

この近くには妖怪が出ないから村の皆には危機感があまりないみたいだし……私がなんとかしなくちゃ！

シン、カヤ

幼馴染から恋仲になり子供を作った夫婦。

カイ、コウ

村人A、B 所謂モブキャラ。

第六話 迷子

お弁当、おやつ、準備、よし！

今日も人里に行きましよう。

鬼が出たって噂が流れてから毎日村に通ってます。

村の周りには半径二キロの地点に村の近くに來た妖怪に反応する感知式の薄い結界を張ってみたわ。

今まで何度も感知したけど殆どが、かなり力の弱い妖怪たちだったわね。

「あ、イブキさん！おはようございます。」

「おはよう、黄金^{こがね}ちゃん」

今、挨拶してきたのが山妖怪の黄金ちゃん。

姿は大体十三歳ぐらい女の子かな？土色の和服に緑の髪、髪はショートカットの元気な女の子。

「イブキさん、今日も人里に行くんですか？」

「ええ、そうよ。黄金ちゃんも山歩き？」

黄金ちゃんは実は能力持ちで“山を創る程度の能力”を持ってる他の妖怪よりも力が強い妖怪なの。

「はい、そうです！今日も山菜やら果物を持って行くんで、美味しいご飯お願いします」

「うん、今日もよろしくね。腕によりを掛けて作るから。あと黄金ちゃん、はい、これ」

おやつに作った包みに入ったクッキーを渡してあげる。

「わはー！今日も頑張るぞー！」

そして、元気良く山の方に向かって行った黄金ちゃん。

黄金ちゃんは私と同じで人間を襲わない変わった妖怪ね。

黄金ちゃんの山を作る程度の能力は一瞬で山を作るんじゃないかと、徐々に作るから人間達にも不信感を持たせないから良い能力よね。

そんな黄金ちゃんの妖力が減ってきたら、私の能力で黄金ちゃんの妖力を増やして回復してあげてるのよ。

“うわ~~~~ん”

あら？これは泣き声？

村が近いとはいえ、この森にいるのは危ないかも。

泣き声が聞こえてくる方に向かって歩く。

・
・
・
・
・

ガサガサとワザとらしく音を出しながら泣き声のしている場所についた。

「誰か居るの？」

「ひぐう!？」

ひょっこりと茂みから顔を出して声を掛けたけどビックリさせちゃったわね。

誰かと思っただけどカヤちゃんのところのウンちゃんじゃない。

「こんなところでどうしたの？迷っちゃった？」

ウンちゃんの目線に合わせるようにしゃがんで聞いたらコクリと頷いてくれた。

「そうなんだ。じゃあお父さんかお母さんと一緒に来たのかな？」

首を横に振った、まさか、ウンちゃん一人で来たのかしら。

「ここに一人で来たのかな？」

コクリと頷く。

「村の場所分かる？一人で帰れる？」

「……わかんない」

ここでやっと喋ってくれたわね。

「そうなの、じゃあお姉さんが村まで送ってあげるわね」

「ほんとう？」

「本当よ、村まで何て一っ飛びよ。さ、お姉さんの背中においでおんぶしてあげる」

「…うん」

ユンちゃんをしっかりとおんぶして立ち上がる。

「しっかり捕まってるね」

「うん」

ゆっくりと上昇して木の高さ以上になってから村に向けて微速前進
つと。

「わ、わー。お姉ちゃん飛んでる、飛んでるよ！」

さっきまで元気なかったのに、子供って切り替えが早いわね。

「うふふ、どう気持ち良いでしょ」

「うん！」

「ほら、あっちに村が見えるわよ」

「あ、ほんとだ！」

「これで村に帰れるわね」

「うん！」

・
・
・
・

五分くらい飛んで村の少し離れた位置に着地。

「さ、着いたわ、もう一人で大丈夫ね」

「うん」

しゃがんでユンちゃんを下ろして森の方に向かう。

「あ！お姉ちゃん、待って！」

？何かしら

「お姉ちゃんの名前教えて、私はユン」

「イブキよ。それじゃあ、ユンちゃん。それと一人で森に入らない
のよ」

妖力を使って風を起こして隠匿術を使って姿をくらませた。

「イブキお姉ちゃん、ありがとー！」

やまぶき
山吹 こがね
黄金

種族 妖怪（山妖怪）

性別 女

能力 山を創る程度の能力

外見 大体13歳ぐらい、土色の和服を着てる。

髪は緑でショートヘア、瞳は黄金色

趣味 山歩き、イブキの作る料理を食べる事。

好きなもの 山、イブキ、イブキの作る料理

嫌いなもの 山を荒らす者

元ネタ やまわらわ 山童と言う山に住む妖怪

各地で山を創りながら転々と旅をしていた大妖怪、人間を襲わない特殊な妖怪、襲ったとしても悪戯程度。

イブキと出会い、イブキの菓子を食べる以来イブキの事が気に入る、

イブキの住居の近くに山を創りそこに住んでいる。

イブキの事は尊敬している。

第六話 迷子（後書き）

お菓子の出番があまりない…

第七話 鍛練そして…（前書き）

土曜日に親知らずを抜いてもらった・・・ほっぺたが腫れて痛いです。

第七話 鍛練そして…

「イブキさん、今日もご指導お願いします。」

「それじゃあ、何時も通り瞑想を一時間して霊力制御、飛行訓練、弾幕生成の鍛練よ。」

「はい！」

今元気に返事したのはユンちゃん。

どうして彼女に霊力の使い方を教えているかというと、数年前にユンちゃんが森で迷子になった次の日にまた一人で森に来ていたユンちゃんに尋ねてみたら“イブキお姉ちゃんみたいに空を飛んでみたい”って言うてきて私が何度駄目って言っても諦めなくて、それで質が悪い事に霊力持ちだったから、結局私の方が折れる形で了承して今に至る訳なのよ。

空を飛べる様にするのに何で攻撃手段を教えているかというと、力は引き寄せるって言うし念の為に自衛手段も教えている。

そしてユンちゃんも今年で16歳になる。

私としてはそろそろユンちゃんには結婚とかして欲しいな、今の時代じゃ12歳ぐらいでもう結婚とか当たり前だからユンちゃん絶賛いき遅れ中なのよ。

ユンちゃんなんてかなりの美人さんに成長してるのに未だにそういう話は聞いた事が無い、ユンちゃんの将来が心配だわ。

ユンちゃんの鍛錬は早朝からお昼に掛けての時間、それが終わったら私の家でご飯を食べてそれから村帰って村での仕事をする、これがユンちゃんの生活スタイル。

・
・
・
・
・

・ 鍛練が終わったの昼食の時間に切り出した。

「ユニちゃん、そろそろ男の人とくっつかないの？」

「うっ、それは…その修行の方が楽しいといえますか…」

「じゃあ、質問を変えるわ。好きな子はいないの？」

途端に顔を赤くして固まったわね、かわいい。

「うふふ、その反応は要るって事ね」

「……っ、イブキさんはどうなんですか！」

「私は妖怪だからいいのよ」

「……もうしりません！」

ぷりぷり怒って黙々とご飯を食べていつてる。

私もご飯を口に運んでいく早く食べないとユニちゃんに全部食べられるわ。

・
・
・
・

昼食が終わって後片付けも終わってユニちゃんが帰る時に声を掛ける。

「ユニちゃん好きな人がいるなら、ちゃんと好きって気持ちを伝えとかなきや誰か他の女の子に取られちゃうわよ。」

「……分かってますよ」

そう言い残して村の方に飛んで帰って行った。

もうユニちゃんの鍛練を見なくてもよさそうね。

今のユニちゃんの実力は大妖怪を打倒とは行かないけど、中妖怪ぐらいなら倒せるぐらいまでは成長したし、もう私が見なくても十分自己鍛練でどうにかできるはずよね。

明日の鍛練の時にこの事を告げよう。

私も警戒に行こうかしらね。

っ!?!?……大妖怪クラスの反応、感知結界に入らなくても分かるな

なんて結構な妖怪のようね。
急いで村に行かなきゃ、いつ村を襲いに来るか分かったものじゃない。

ユン

種族 人間

性別 女

能力 なし

外見 背は150ぐらい、髪は黒色でセミロング。

顔立ちは整っていて美人。

出でいるところは出て引っ込んでいるところは引っ込んで

いるナイスバディ

趣味 修行、イブキと一緒に居る事

好きなもの 特になし

嫌いなもの イブキの敵

人里に住むシンとカヤの一人娘、森で迷子になって以来イブキに修行をつけて貰っている。

霊力を扱う事に才能があったのかイブキの修行で霊力が飛躍的に上がり、大体中級妖怪ぐらいなら簡単に倒す事が可能になった。

黄金と同じくイブキ信者。

第八話 鬼襲撃（前書き）

ゆっくり執筆中・・・内容薄いかも

第八話 鬼襲撃

side ???

ふざけた噂を聞いて俺はこの場所までやってきた。

何でも人間を襲わずに逆に護っている妖怪が居ると言う噂を。

ふざけてやがる。

俺達妖怪は人間を襲い、攫い、殺し、食べる存在だ。

それをなんだ。

他の力ある妖怪がそのつの護る人里を襲いに行ったら逆に半殺しにされたと言う。

まったく、ふざけた妖怪だ。

見つけたらこの俺が捻り殺してやる。

「イブキさん！こちらに向かってきている凄まじい妖気に気付きましたか！」

さつき村に帰って行ったユンちゃんが帰ってきたわね。

「気付いているわよ、ユンちゃんは危ないから村に帰ってなさい。

今の貴女じゃ到底敵う相手じゃないの」

「ですけど、何か私にも、っ！……分かりました。イブキさん、どうか勝ってください」

ユンちゃんに妖気で圧力を掛けると分かってくれたようで村の方に帰って行った。

「ふう、黄金ちゃん、居る？」

「居ますよ、イブキさん」

「悪いけど、他の子達を黄金ちゃんの山で安全な場所に避難してくれるかな？」

「分かりました、イブキさんはどうしますか？」

「私は妖気を撒き散らせながら来ている子の相手をするわ」

「そうですか、心配ないでしょうけど、気をつけてください」

黄金ちゃんは森の奥に走って消えていった。

そろそろ私も行きましょうか。

空を飛び目的の妖怪を見つけてその妖怪の前に降り立った。

大きいわね。目測で大体200cmはありそうな赤いちゃんちゃんこを着た大男、無駄の無さそうな引き締まった筋肉、それに額には一本の角が生えている、鬼かしら。

「貴方この先に何のようかしら？」

「お前のような雑魚には用はない。この先に住む大将を出せ」

妖力をかなり抑えているとはいえ、私を雑魚扱いするなんてねえ

「用件を言いなさい、話しはそれからよ」

「この大将を殺しに来た、そのついでに人里の人間を喰らう。」

あの子達を喰らう？出来るとでも思っているの？

テメーは私を怒らせた。

「そう、ならそれは許されないわ。貴方をこの先には行かせない」

「この俺と殺し合おうってか？止めておけ、お前のような雑魚と殺し合ったって面白くも無い」

「貴方が探している大将がこの私でも？」

途端に眼付きが変わり、体から妖力が炎に変わり吹き出ている。

「とんだ拍子抜けだ。殺しに来たのがこんな雑魚だとはな」

「さっきから雑魚、雑魚って失礼っね！」

抑えていた妖力を全開とは行かないものの開放する。

「ほう、これは楽しめそうだ」

それと同時に私の方に踏み込んできた。

私は両手の先に拳台の圧縮した妖力球を作り構える。

この妖力球は手の動きに連動するように成っていて、手を振ったらさながらヨーヨーみたいの手元にちゃんと帰ってくるように成っている。

「そのような物が俺に効くと思うなよ！」

迫る炎を纏った右拳を左手の妖力球で叩いて逸らして、右の妖力球を鳩尾に叩き込む。

「ぐう、らああ！！」

炎を纏った左拳をひょいっと後ろに下がる事で簡単に避ける。

返礼にその左手に全力で左の妖力球を叩きつける“ゴキヤ”っと鈍い音がした。

「ぐうおおおおお……な、めるなあ！！」

巨大な炎弾を作り私に投げてきた。

森が燃えるじゃない、炎弾より上に飛び上がって炎弾に向けて両手の妖力球を開放して、その妖力を炎弾に叩きつける。

見事に炎弾は消し飛んだ。

「くっそおおおおお！！！！」

体から炎を吹き出しながら突っ込んできた。

「坊や、森が燃えるじゃない、少しお仕置きよ」

両手に再度妖力球を作り迎撃に入る。

妖力球で足を払い、お腹に妖力球を叩き込み浮き上がらせる、次に顎に妖力球を入れて空中でくるくる回ってる鬼に両手で妖力球を上から下に叩き下ろすように鬼に当て地面に叩き落す。

「お、ぐ、ごほ」

驚いたまだ意識があるのね、以外に鬼って言うのはタフなのね。

鬼の首を掴んで持ち上げる。

虚ろな眼で睨んでくる、私は容赦なく地面に叩き付けて意識を刈り

取った。

取り合えず死んではないわね。

よいしょと鬼を担いで私の家に向かって飛んで帰った。

第九話 仲間になった（前書き）

おはこんばんちは、9話目ですどうぞ

第九話 仲間になった

「イブキさん、あの鬼はまだ起きないんですか？」

「そうね、まだ起きる気配はないわね。」

ユンちゃんにそう答えて困ったわね、と呟く。

あの鬼を倒して家に連れ帰ってからもう三日も経つのに向に起きる気配を見せない。

息はしてるから昏睡状態って所かしら、怪我自体は私の妖力とか上げたり、回復力を複製して怪我は完治はしているから起きてもいいはずなのに、どうしてかしら？

「イブキさん、もうこのままこの鬼を葬りましょう……ええ、イブキさんに手を上げたんですから葬られて当然です。フッフッフフ」
なに、この子怖い、何気に霊力の炎を灯した手を鬼に翳してるし、
ってそうじゃなくて。

「駄目よ。この子には聞きたい事があるんだもの」

「そうですか、では葬るのは諦めます……」

ユンちゃんってこんな事しようとする子だったかしら？

「ですが、一発だけ殴ります。」

「え？あ…」

ユンちゃんのセリフを聞いた次の瞬間には、ユンちゃんは鬼の横に居てもう鬼を殴っていた。

“ドゴン！”

辺りに鈍い音が響き渡った。

「ユンちゃん、何してるのかしら？相手は怪我に、怪我妖怪なのよ」
ユンちゃんは明らかに私の想像以上の力を出している。

鍛えさせ過ぎたかしら。

「怪我なんてもう治っているじゃないですか、今私が殴ったのは罰です。本来なら殺されて当然なんですから」

「そうなの？」

「そうなんです」

何の罰か分からないけど取り合えず納得しておこう。

別にユンちゃんが怖いってわけじゃないんだからね！

「あ、そうだ。ここの所バタバタしてて言えてなかったけど、鍛練の件だけでも私が教える事はもうないから、私のところに来なくていいわよ」

「え？それってどういうことですか？」

途端に大人しくなって青褪めていく。

「だから、修行は終わったから、私のところに修行しに来なくてもいいって事よ。別にもうここに二度と来るなって行ってる訳じゃないんだけど」

「な、成程そういう事だったんですね。……良かった。」

勘違いみたいなのが解けてホッと一安心している。

「それじゃ、私はこの辺で帰ります。また近いうちに会いに来ますから」

「バイバイ」

ユンちゃんに向けて手を振って見送った。

さてと

「起きてるわよね、鬼さん？」

「……いつ起きていると気付いた」

私が声を掛けるとムクリと寝かしつけていた布団から上半身を起こして問いかけてきた。

「ユンちゃんが怖くなった辺りからかしら、貴方がユンちゃんの殺気に反応してピクリと動いたのが分かったもの」

「最初からか？何者なんだアンタ。あと、あの人間は本当に人間か？鬼であるこの俺が、たかが人間の女の殴りで痛みを感じるなんてないんだが？」

「唯のしがない大妖怪よ。それとあの子は歴れっきとした人間よ。唯、少

し私が鍛えすぎただけよ。」

「妖怪に鍛えられた女か、中々に闘いがいがありそうだな。」
楽しそうに笑っているけど。

「私があの子に手を出させるとでも思っているの？」

「そんな事は思っていない、アンタはあの女を大事にしているのは分かっていて、機会があれば戦いたいと思ったただけだ」

あの女と闘ったら楽しかったろうな、と呟かれてもね。

鬼って闘いが好きなのかしら？

「それで本題に入るけど、っと、その前に私はイブキよ。で何で私を倒そうと思ったの？」

本題に入ったら鬼の表情が真剣なものに変わった。

「俺は炎鬼だ。噂で人間を襲わずに護っている妖怪が居ると聞いて、妖怪の定義を否定している妖怪を殺そうと思ったからだ。」

妖怪の定義ってねえ……私には関係ないかも

「人間を襲い、攫い、殺し、喰らう事だったかしら？」

「分かっているのに、何故そうしない？俺達妖怪の本能に何故従わない？」

「本能も何もそんな事、一度も感じたことないわよ。それと私の他にも一人人間を襲わなくてもいい子もいるわよ」

炎鬼君はなん、だと？という顔で固まっている。

数秒の沈黙の後に漸く炎鬼君が口を動かした。

「イブキは特殊な妖怪って事なのか？」

「そうなるわね。」

今の今まで一度たりとも人は襲ったことないわね。

むしろ逆に陰ながら助けているわね。

「イブキの在り方って事か……ううむ」

炎鬼君は一人で何だか納得しているみたいね。

「決めた、俺はイブキの下に付く。面白い妖怪のイブキと居れば楽しめそうだな。」

「へ？そうなの。私の下に付くのは好きにすればいいけど人里を襲

「つちや駄目よ」

何だか鬼の炎鬼君が私の仲間になったみたい。

「分かっている。イブキの大事な人里なんだろう？ 大将の大事にしているものを壊すわけがない」

炎鬼君は布団から立ち上げて戸を開けて外に出た。

行動が速いなあ

「炎鬼君、何処に行くの？」

「近場に適当な住処を探してそこに住む。また会いに来る、大将」
スタスタと去って行く炎鬼君の背中を見送りながら思う。

大将は止めて欲しいなあ、私妖怪だけど女の子なんだけどなあ。

炎鬼^{えんき}

種族 妖怪（鬼）

性別 男

能力 炎を操る程度能力

外見 赤髪の短髪、額に角がある、身長が190程の大男。

身体つきは無駄のない筋肉がついている。

服装は赤いちゃんちゃんこを着込んでいる。

好きなもの 強者、戦い、酒

嫌いなもの 嘘、裏切り

各地を転々としながら強者と戦って居た鬼。

風の噂でイブキの事を知り、妖怪然としないイブキの事を殺しに来たが返り討ちにされた鬼。

それからイブキの事を気に入り、イブキの下に付く事にした。

その事で黄金とユンからはあまり気に入られてない。

第九話 仲間になった（後書き）

話の流れが緩やか過ぎるでしょうか？

第十話 人間を越えてしまった…（前書き）

ユン人間を越える

第十話 人間を越えてしまった…

「今日こそ、勝たせて貰うわ！炎鬼！」

「口先だけは一丁前だなウン。何時もの様に負かしてやるから掛かってこい」

「言ったわね、今日こそ吠え面かせてやるわ！」

私の家の近くでまた、ウンちゃんと炎鬼君の戦いが始まった。

この戦いは炎鬼君が此処に来てから大体十年間ぐらいの間、一週間に一回のペースで続いている、その所為でここら辺一帯は広場みたいになってしまったわね。

それでウンちゃんは鬼である炎鬼君に善戦はするものの、まだ一度たりとも炎鬼君に勝てた事がない。

まあ、当たり前的事よね、人間が簡単に鬼に勝てるはずもないし。

それにしてもウンちゃんの成長は凄いわね。

この十年ぐらいで大妖怪の炎鬼君に渡り合えるぐらいの実力を付けるなんてね。

お姉さんビックリだ。

「これでも喰らいなさい！」

「また、馬鹿の一つ覚えの弾幕か！」

そうそう、この十年ぐらいでウンちゃんも結婚して子供も出来たのよね。

その子がメイって子で、今私の隣で私の作ったクッキーをはもはもしながら二人の戦いを見ている。

メイちゃんはウンちゃんの力を引き継いだみたいで、子供の時のウンちゃんよりも霊力が遥かに大きい。

ウンちゃんに影響されてかメイちゃんも私の所で修行を積む毎日を送っている。

「それ、お返しだ！」

「そんな一発の火球なんて簡単に避けれるわよ！」

メイちゃんも今年で六歳になるのにウンちゃん譲りの才能を発揮して靈力制御を完璧にこなしている。

まったく末恐ろしいわね。

“クイクイ”

「ん？どうかしたかしら？メイちゃん」

「イブキ様、母様勝てそうですか？」

メイちゃんは私の事を何故か様付けで呼んでくるから困ったものね。

「何時もと変わらなければ勝ち目はないわね」

「そうですか……」

そんな風に話しながら戦況に目を向けると変化が在ったみたい。

「イブキ流靈力球操作術、一投。」

「ほう、それはイブキの技だったか。少しは楽しめそうだな。」

へえ、まさかウンちゃんは私が使う妖力球を真似して靈力球を作ったんだ。

中々、やるわね。

私が使うこの技は大量の妖力を拳大まで圧縮して使う技。

当たれば岩すらも砕く威力が出る。

と、いうより私が使うこの技には名前なんて付いてなかったんだけど：イブキ流なんて、何だか恥ずかしい。

ウンちゃんはそれを左手に待機させて右手で弾幕を放っている。

「メイちゃん、この戦いどちらが勝つか分からなくなってきたわよ」

「！本当ですか！？」

「ええ、本当よ」

ウンちゃんの作った靈力球の質を見ると、靈力の圧縮率は完璧に近い状態、靈力コントロールも完璧な様で靈力球に一切の揺らぎが見当たらない。

私が教えた事なんて一度もないのに、私が偶に炎鬼君と戦っている時に使っていたのを見て自分の物にしたのね。

なんて才能なの？私だってコレを使えるようになるまで百年は掛かったのに。

「こんな弾幕程度！」

炎鬼君はユンちゃんが放った弾幕を炎を纏った拳、炎拳で掻き消した。

「ハッ！」

次の瞬間には炎鬼君の背後に回っていたユンちゃんが霊力球を炎鬼君に肩口めかけて叩き下ろした。

「オラッ！」

“ドガン！！”

炎鬼君は炎拳で霊力球を殴るという形で受け止めた。

止められたユンちゃんは直ぐ様距離を取り、再度炎鬼君に突撃を仕掛ける。

流れる様に霊力球で連撃を放つも悉く躲くゞされた。

足に放ったものは後ろに引く事で避けられ、胴体を狙ったものは半身をずらして避けられ、顔を狙った一撃も首を少し動かすだけで避けられた。

「この程度か！見損なったぞ！」

「これなら、どうよ！」

また同じ様に炎鬼君の胴めかけて霊力球を放った。

「そんな物、俺には当たらんぞ！」

「それはどうかしらね！散！」

ユンちゃんのその言葉とともに霊力球が弾け、散弾になって炎鬼君を襲った。

「この程度で「縮地！霊崩拳！」ごおっ！？」

今まで出していたスピードを遥かに上回るスピードで炎鬼君の懷に潜り込んで、踏み込んだ足は地面を碎き、拳を打ち込まれた炎鬼君は後ろにある森の中に木々を折りながら吹き飛んでいった。

……ユンちゃん、強さが完璧に人間卒業しちゃた。

肩で息をしていたユンちゃんが糸が切れたように倒れた。

「母様！」

「ユンちゃん！？」

急いでユンちゃんの容態を確認すると、息をちゃんとしていて安心した。

霊力の使い過ぎによる疲労で倒れただけみたい。

「イブキ様！母様は大丈夫なんですか！」

「メイちゃん、大丈夫よ。霊力の使い過ぎで倒れただけみたいだから、少し眠らせて休ませれば大丈夫よ。」

「そうですか…よかった…」

私の家にユンちゃんを寝かせてからメイちゃんに看病して貰っている間に炎鬼君の方に向かう。

・
・
・
・
・

あ、いたいた。

炎鬼君は見た目はボロボロだけど何とか元気そうね。

「炎鬼君、大丈夫？」

「ぐう、何とかな」

まだダメージが残っているみたいで顔を顰めている。

「にしても、あいつも強くなったな。まさか、この俺が負かされるなんてよ」

「そうよね、普通は有り得ないわよね。」

真剣な顔つきになった炎鬼君がいる。

どうしたのかしら？

「イブキ、俺、前から決めてた事があるんだ。」

「何？」

「ユンの奴に負けたら、ユンが住んでる人里を護る事を」

「そう、後悔はない？」

「ない、俺が決めた事だ。」

「そう、なら頑張りなさい。」

炎鬼君の答えを聞いて私の家に向けて歩く。

炎鬼君と同等の力を持つユンちゃん、大妖怪の炎鬼君、同じく大妖怪の黄金ちゃんが居れば、この人里は大丈夫かしらね？

そろそろ数年前にクロウから手紙で頼まれた事を調べに行こうかしら？

技

イブキ流霊力球操作術、一投。

イブキが使う妖力球を真似てユンが霊力で再現した技。

霊力球一つに込められた霊力は100（弾幕一つが大体一という計算）それを拳大までに圧縮し自分の手の様に操る高等技術。

ユンが言った一投は霊力球が一つと言う意味。

これが二投、三投と増える度に霊力球が増えていく（ユンの実力では一投までが限界）

この技名はユンが勝手に付けたもの。

散

霊力弾、霊力球を指向性を持たせて散らせる技。

縮地、霊崩拳

霊力による身体強化を限界まで上げて、爆発的な速さで相手の懐ま

で近づき強烈な震脚と共に、霊力の込められた拳を打ち込む、必殺技。

威力は

小妖怪↓木っ端微塵。

中妖怪↓肉片が残る位。

大妖怪↓怪我ゝ大怪我位。

第十話 人間を越えてしまった…（後書き）

書き溜めていたストックがなくなっていく～

第十一話 出発準備

「イブキさん、私達三人にお話ってなんですか？」

今、私の家にユンちゃん、黄金ちゃん、炎鬼君に集まってもらっている。

「話って言うのは、少しの間、私ここを離れようと思うの」

私がそう言うのと数秒三人は固まった。

「な、何言ってるんですか、イブキさんが居なかったら、ここはどうなるんですか」

「そうですよ！イブキさんが居なかったら里はどうなるんですか！」

「大丈夫よ、人里はユンちゃんが居れば大抵の妖怪は太刀打ちできないから。それと、ここに居る妖怪達には暗黙の了解で人里は襲ってはいけないって伝わってるからね。」

「「うっ……」」

痛いところって言うか、分かっている事を言ったら二人とも黙ってしまった。

「イブキ、イブキがここを離れようとも、何の問題も起こらないだろうが、この地を治める大将が居なくなるのは俺はどうかと思うぞ」

「それなんだけど、私が居ない間は黄金ちゃんと炎鬼君に私の代わりをやってもらいたんだけど、いいかしら？」

そしたら私が居なくなったら大丈夫なはずなんだけど

「……大将が言うならそうするが、何故ここを離れるか理由を教えてください」

「「そうです！理由を教えてください！」」

そういえば、理由を言っていなかったわね。

「そうね。昔の友人？友神かしら？から数年前に手紙がきて調べものを頼まれたのよ。この地域の基盤は整ったから少し調べに行こうかなって思ったのよ。」

「その友神とやらが、その調べものを自分で調べに行けばいいじゃ

ないですか。」

ユンちゃんが言うのも、もったもんだけだね。

「それが駄目なのよ、彼自身が多忙で動けない状態だからね。だから彼は私にお願いしてきたのよ。」

「だからと言ってイブキさんが調べに行かなくてもいいじゃないですか、その神の部下なり、私達のようなイブキさんの元に集まった妖怪達に頼めばいいじゃないですか」

黄金ちゃんももったもな事を言うけど、これは私とクロウの問題みたいなもののよね。

「黄金ちゃん、彼には部下なんて居ないのよ。それと私は他の皆に苦勞を掛けたくないの。分かってももらえないかしら？」

黄金ちゃんの頭を撫でて、抱きしめてあげた。

「イブキさん……」

「それにもうここには帰って来ないって訳じゃないのよ？」

「「本当ですか!？」」

「本当よ、お姉さん嘘吐かない。初めに言ったけど、ここを“少しの間”離れるって言ったのよ。簡単に言えばちよっと旅行に行って来る感じかしらね。」

「良かったですね!黄金さん!」

「良かったよ、ユン!」

二人とも嬉しいのか抱き合って喜びを表している。

「イブキ、その二人は置いといて、その調べものはどれくらい掛かりそうなんだ?」

炎鬼君が聞いてきた期間は正直、私にも分かりそうもない。

「分からないわ。取り敢えず全国をしらみ潰しに探すつもりだから、早くて一年、遅くても百年ぐらいは掛かりそうね。それで探し出せたら、その調査もあるから更に十数年は掛かるわね。あ、でもここには定期的に帰ってくるから心配しないでね。」

「そうか、ちゃんと帰ってくるのか。それなら俺は止めたりしない。」

「ありがと」

炎鬼君に微笑みながらお礼を言ったら何故かそっぽを向かれてしまった。何でかしらね？

その日の夜は炎鬼君が宴会を開いて盛大に盛り上がった。

第十二話 出発そして到着（前書き）

正直言ってかなり短いですが、最新話どうぞ

第十二話 出発そして到着

「それじゃ、皆行ってくるわね」

「イブキさん、お気を付けて」

「イブキさん、帰りを待ってますから」

「イブキ様、お元気で」

「達者でな」

見送りに着てくれた、皆に笑顔で手を振ってから空に上がる。

人に認識されない高さまで上がってから移動を始める。

取り敢えず西側から調べに行こうかしらね。

移動しながら私が旅に出る半年間を軽く振り返ってみた。

：黄金ちゃんがほぼ毎日私の所に来て甘えてきてたわね。

何だか娘が出来たみたいで可愛かったなあ。

あ、そうそう来ると言えば炎鬼君が私の家に来る頻度が多かったわね。

大抵、酒盛りになってたけどね。

ウンちゃんとメイちゃんは修行の日々だったわね。

ウンちゃんは私の技の技術向上、メイちゃんは技術方面の修行から戦闘を意識した修行に切り替えたわね。

だけど、まだまだ子供だからか、戦闘技術はいまいちだったわね。

私の方でも旅道具を作ったわね。

荷物入れを物凄く頑張って作ってみたんだけどね。

凄く疲れたわ、私が思いつく限りの妖術を駆使して、荷物入れの中を四次元空間に変えて料理道具やら菓子道具を入れて持ってきてるわ。

あとは、遠距離でも連絡が取れる通信符も作っていざという時の為にウンちゃん、黄金ちゃん、炎鬼君に通信符を渡してあるわね。

・

・ ・ ・
つと、思い出してる内に最西端に着たわね。

近くに小さな村が在るから人に見つからない様に少し離れた山の頂に下りる。

「ふう、到着つと、まずはあの村から調べて行こうかしらね」

ユンちゃんと修行してたら、いつの間にか使えるようになっていた霊力。

それを妖力を出来るだけ抑えて霊力を纏う、これで妖怪だってすぐにばれる事はないでしょう。

「これでよし、あとは服装ね」

私の服装は時代錯誤もいいところだから、ユンちゃんの所で何着か分けて貰った服を恥ずかしいけどここで着替える事にする。

丁度、草が茂って周りからは見えない様になってる所があるからそこで着替える。

「さてと、調べに行きましょう」

着替え終わって荷物を持って村に向けて下山する。

奇跡的に周りには妖怪の気配はないみたいね。

この調査、早く終わるといいわね。

第十二話 出発そして到着（後書き）

誤字、脱字、ご意見、ご感想があればお願いします。
作者が喜びます。

第十三話 調査開始（前書き）

今回もあまり先に進まないスローテンポです。

第十三話 調査開始

取り敢えず山を下りて村の近くまで来たけど、どうやって村の人と接触しようかしら？

というより、設定考えてなかったわ。

探し物を探して旅をしている、がいかしら？

お菓子を広める為に旅をしている、がいかしら？

うーん？この二つぐらいしか案が浮かばないわね。

私らしいのはお菓子を広める為に旅をしている、がいかしらね。

そうと決まれば、行ってみようかしらね。

・
・
・
・

「おや？アンタ見ない顔だねえ、どこから来たんじゃ？」

村に入って辺りをきよろきよろしていると初老の男性に声を掛けられた。

「ここから東の山を越えた先から来ました。それで貴方は誰ですか？」

「おお、そうかいそうかい、態々（わざわざ）こんな辺鄙（へんぴ）なところまで来なすったな。儂はこの村の村長やつとるコスケというもじゃ。アンタは？」

「私はイブキと言います。ここには私の作る甘味物を広める為に来ました。」

「若い女子（おなご）で一人旅をしとるのか？」

驚いた表情をしながらコスケ君は聞いてきた。

「ええ、そうですよ。私こう見えても能力持ちなんで、ここまで能力を使いながら来ました。」

「おお、そうだったのか、それなら心配は無用じゃな。かくいう儂

も能力持ちなんじゃよ。」

人間の能力持ちなんて珍しいわね。

「コスケさんはどういった能力なんですか？」

「近寄らせない程度の能力じゃよ、この村の周りに妖怪が居らんかったら？ 儂の能力で来れない様にしとるんじゃよ。して、イブキの能力はなんじゃ？」

私も一応妖怪なんだけど、簡単に来れちゃったわよ。

「私の能力はありとあらゆるものを複製する程度の能力ですよ。こんな感じに」

近くにあった小石を拾って軽く投げて小石を十個ぐらいに増やしてみた。

「おお！これはすごいのお。そうじゃそうじゃ、こんなところで立ち話もなんじゃから儂の家で話してみんかの？」

コスケ君の家に情報収集とお菓子作りでもしようかしらね。

「そうですね。それではお言葉に甘えて、お邪魔させていただきます。」

「そうかそうか、こっちじゃ付いて来るんじゃぞ」

コスケ君に付いて少し歩いて行くとすぐに家に着いたみたい。

この村の家は簡単な骨組みと藁で出来た家で、コスケ君の家も例に漏れずこの作りの家ね。

私が居た近くの人里は、私が少し手を貸したから木造一軒家の家が建ってるのよね。

若干、文明が進んでるかもしれないわね。

コスケ君の家に入ってからは他愛もない話をして、この村に居る間はコスケ君の家に滞在する事に決まったわ。

それでコスケ君に、この村周辺の情報を聞いてから数日間の滞在のお礼に、おはぎを作ってあげたら好評でもっとくれてせがまれたけど、ここに居る間はいくらでも作れるからって伝えると渋々と引いてくれた。

この時点でもう夜になってしまったわね。

「コスケさん少しいですか？」

寝る準備をしていたコスケ君に声を掛ける。

「なんじゃね？」

「私の能力ってありとあらゆるものを複製する程度の能力じゃないですか」

「それがどうしたんじゃ？」

訝^{いぶか}しげな表情浮かべて私を見るコスケ君。

「私の能力は他の人の能力ですら複製して自分の力に出来るんですよ。それで折り入ってコスケさんをお願いがあるんですよ、コスケさんの能力を複製させて貰えないでしょうか？」

「構わんよ、儂の能力ぐらい、いくらでも複製するがええ」

「ありがとうございます。それでは早速……はい、出来ました。」
近寄らせない程度の能力ゲット、これで旅をするの時楽になりそうですね。

「良かったのお、もう夜も遅い儂は寝るぞい、イブキも早く寝るのじゃぞ」

「はい、おやすみなさい。コスケさん」

・ ・ ・ ・ ・

この村に来てもう十日になるわね。

そろそろ他の村に移動しようかしら、たしかコスケ君に聞いた話だと、ここから北東の山を越えた先に村が在るらしいからそこに行っ

てみようかしらね。

「イブキねえ！今日は何作ってくれるんだ！」

「イブキお姉ちゃん！今日のおやつは何！」

今元氣に來た子達はこの村の子でタロ君とヨミちゃん、この村の最年少の元氣いっぱい二人なのよね。

見えて微笑ましく思ってしまうわね。

「ごめんね、タロ君、ヨミちゃん。お姉ちゃん今日にはこの村を出ようと思うの、だから今日はおやつ作ってあげられないの。本当にごめんね。」

「……………え？」

二人の間に数秒の沈黙が……私が何を言ってるのが分からないみたいな顔ね。

「イブキねえ！何で出て行くんだよ！」

「イブキお姉ちゃん行かないで！」

「あらあら」

二人ともわんわん泣いて抱きついて放してくれなさそうね。

ちよっ、タロ君、ヨミちゃん足にしがみ付かないで！

た、倒れちゃう！

「あららら、きゃっ」

結局倒れて尻餅ついたけど二人を巻き込まなかったわ。

それで座ってる状態だから二人とも私の胸にしがみ付いてきちゃった。

身動きが取れなくなったわね、まあいいかな。

二人に頭を優しく撫でてあげる、これで会うのも最後なんだから。

・
・
・
・
・

一時間ぐらいしたら二人とも泣き疲れたみたいで私の胸の中で眠っ

ちゃったみたい。

どうしようかしら……

「……何をしとるんじゃ？」

丁度いいところにコスケ君が帰ってきてくれたわ。

「コスケさんタロ君お願いできませんか？」

「別にいいが何があったんじゃ？」

タロ君を受け取ってくれたコスケ君に事情を説明してみる。

「実はそろそろ他の村に行こうと思ひまして、それをこの子達に話したら泣き付かれてしまいました。この状況になったんです」

「おお、そうなんかいのお。寂しくなるのお」

コスケ君そんなに残念そうな顔しないで

「そうですね。コスケさん、タロ君を家まで送ってあげてください、私はヨミちゃんを送ってきますから」

「分かったぞい」

ヨミちゃんを家に送って、コスケ君の家に戻ってコスケ君に別れの挨拶をして他の皆にも挨拶を済まして村を出た。

村を出た時にはもう夜になっていた、妖怪が出てきそうで面倒くさそうだわ。

イブキの能力更新

ありとあらゆるものを複製する程度の能力

New“近寄らせない程度の能力”

コスケ

種族 人間

性別 男

能力 近寄らせない程度の能力

イブキが初めに訪れた村の村長をしている初老の男性。

コスケの能力で常に村の安全は守られている。

能力は万能じゃなくて大妖怪クラスになると普通に近づいてくることがある。

タロ

種族 人間

性別 男

イブキに懐いた男の子、イブキ大好き。

ヨミ

種族 人間

性別 女

タロと同じくイブキに懐いた女の子、イブキ大好き。

第十三話 調査開始（後書き）

いかかがだったでしょうか？

皆さんにお聞きしたいのですが登場人物紹介のページを作った方がいいのでしょうか。

誤字、脱字、感想があればジャンジャン受け付けます。

では、また次回！

第十四話 第二妖怪発見（前書き）

祝1万PV突破！

この小説を読んでもくれた方々に感謝を。
それでは最新話、どうぞ。

第十四話 第一妖怪発見

村を出て北東に在ると言う村を目指して歩いて行くと、森から山に差し掛かる辺りで、コスケ君の能力の範囲外に出たのか妖怪の気配が現れ始めた。

今の私は妖力を限界まで抑えて、霊力を出してるから妖怪側から見たら、力がある人間程度にしか映らないでしょうね。

能力を使ったとしても増やしたばかりの能力は効果が薄いのよね。駄目もとで近寄らせない程度の能力使ってみようかしら。

使ってみたら100メートルぐらいの範囲で妖怪の気配が離れていった、コスケ君と比べると雲泥の差ね。

コスケ君の場合はキロ単位で発動していたのに、私は100メートルぐらいだなんてね。

まあ、いいわ、進むことにしましょう。

・
・
・
・
・

そのまま進んで行くと山の中腹辺りを過ぎた辺りから、中妖怪ぐらいの力が在りそうな妖怪がずっと私の事を観察する様な気配がしてるのよね。

何かしら？襲って来てくれるなら楽なんだけど。

その状態が頂に着くまで続いて、頂に着いて休憩をしている時に変化が起きた。

離れたところに私を囲むように壁が現れていた。

気にせずおにぎりを食べたり、水を飲んでゆったりしていると、ゆっくりと壁が近づいてきている事に気が付いた。

「さてと、そろそろ行こうかしらね」

わざとらしく声を出して、立ち上がり山を下ろうとする。

壁が人間の目で見える程度の距離にきてから、またわざとらしく声を出してみる。

「あれ？何でこんな所に壁が？」

さわさわと触ってから壁に沿って、歩いて壁がないところを探す素振りを見せながら、囲まれている壁を一周して一言。

「なんで登って来た方にも壁があるのよ！？登って来た時にはこんな壁なかったわよ！？それに壁がさっきよりも高くなってるし！？怖がっている様にした上に、錯乱している様に見せてその場に座り込む。」

さてと、この演技に引っ掛かって出てきてくれるかしら？

“パキッ”

私の後ろの方から木の枝を踏む音が聞こえてきた。

来たわね、取り敢えず。

「ひっ！な、なに！？」

怯える様な仕草をして、辺りをきょろきょろと見渡すと、すぐに目的の妖怪を見つけたけど、取り敢えずは演技を続ける。

「貴女、こんな時間にこんな所で何しているの？」

丁度月明かりに照らされて目的の妖怪の姿が明らかになったわ。

髪はセミロングに灰色で、身長は私より低いから155ぐらいかしら？服装は裾がかなり短い袂たもとの着いた灰色の着物、というより裾が短すぎるわよ！膝上20センチはあるんじゃない！？

あと、外見年齢は大体15、6歳ぐらいかしら？

観察を終えて演技、再開っ

「ひ、人？あ、貴女どうやってここに入ってきたの？周りは壁に囲まれてたはずだけど？」

「私は普通にここに“入って”来れたわ」

“入って来れたわ”のところの不気味に笑いかけてくれた。

正直その笑みは気持ち悪いわね。

「ね、ねえ、貴女、その入って来れたところ教えてくれないかしら

？」

「それは出来ないわ。だってこんなにも美味しそうな人間が居るのに、逃がすわけがないじゃない？」

その一言を言った瞬間、妖怪から妖気が溢れ出して私と妖怪の周りを壁が囲っていた。

そして近づいてくる妖怪。

「や、やだ。こ、来ないで」

震える様に声を絞り出して後ずさって後ろにある壁にぶつかって止まる。

「その怯えた表情可愛いわよ、貴女は一体どんな声で鳴いてくれるのかしらね。」

あゝもうダメ！まさかこんな演技に引っ掛かってくれるなんてね。

「ふつく、ふふふ、あははははははははは！」

「何が可笑しいの？壊れたのかしら？」

「えい」

「！がふっ」

もう演技を止めて妖怪に掌低を当てて吹き飛ばして立ち上がる。

「あゝ面白かったわ。ここまで私の演技に騙されるなんてね、可笑しすぎるわ。」

「演技、ですって？」

「そうよ、貴女が私を見ている時からずっと気付いていたのよ。だから貴女を騙して楽しんだわけよ、分かって頂けたかしら」

見る見るうちに妖怪の表情が憤怒の様な形相に変わっていった。

あらあら、可愛い顔が台無しじゃない。

「人間風情が！舐めた真似を！」

私の周りを囲う様に壁が現れて一気に迫ってきた。

潰される訳にもいかないから、霊力球を出して四方の壁に叩きつけて壁を砕いて妖怪にゆっくり近付いていく。

その際にも壁が四方から何度も迫ってきたけど、全部砕いて恐怖を与える様に笑みを浮かべて近付いていく。

「ふふふ、さっきの威勢はどうしたのかしらね？」

「ああああああ！！！」

今までの壁とは逸脱した大きさの壁が現れて私の方に倒れてきた。
この大きさの壁は靈力球じゃ砕けそうにないわね。

しょうがないわね、手を手刀の形にして靈力球に使ってる靈力を手に纏わせて、壁に向かって一閃すると靈力の刃が壁を切断した。

壁が落ちて出来た砂埃で視界が悪いわね、取り敢えず切った壁の上に移動しようかしらね。

ぴよんと飛んで壁の上に立って靈力を放出して砂埃を吹き飛ばす。

妖怪がいたところを見ると、すっかり怯えきった表情の妖怪が居た。

「なんなのよ！なんなのよ貴女！」

それに答えずに靈力球を作りながら近付いていく。

「やだ！こ、来ないで、来ないで！」

怯えきっている妖怪に出した答えは

「上を知りなさい」

その言葉と共に妖怪の腹部に靈力球を叩き込んで吹き飛ばした、吹き飛んでいく時に何本か木を折りながら飛んでいっちゃったけど大丈夫かしら

吹き飛んでいった方に行って妖怪が死んでないか確認しなきゃ。

暫く歩いていくと木が五本折れた先にぐったりした妖怪が転がっていた。

取り敢えずは息をしているか確認してっと……してるわね。

死んでなくて良かったわ。

でもこの子から妖力が殆ど感じられないわね、この子の妖力を複製してあげてっと、さっきまで休憩していたところまで運んで起きるまで待とうかしら

その間暇だからべっこう飴でも作って待ってようかしら

・
・
・

・ ・ ・
夜が明けてもまだ起きないわね、早く起きないかしら？
ほっぺをつんつん

「ん…」

ほっぺをむにー

「みい…」

なにこの子かわいい。

そのあと小一時間ほど、ほっぺをつんつんとむにーを繰り返してたら起きちゃった。

「……………」

「……………」

目と目が合う瞬間、恋に落ちないわね。

「みぎゃあああああ！」

変な奇声をあげて逃げようとするから優しく抱きしめて逃げられないようにして霊力を引っ込めて妖力を出してみる。

「ぎゃああああああ！放して！もう襲わないから！……あ、あれ？妖怪？」

妖力を出すと大人しくなってくれたわね。

「ごめんね、実は私妖怪なのよ」

「でもさっきまで人間みたいな力出たのに妖怪？？」

襲って来た時と雰囲気はかなり違うわね、これが素なのかしら。

この子も落ち着いてきたし放してあげましょう。

「ちよっと人間達について調べ回らなくちゃいけない事があって、人間達に妖怪だってばれない様にしたのよ。だから人間だって勘違いしたのよ、えっと、貴女名前は？私はイブキよ」

「あ、私は壁妖怪の塗織壁音^{ぬりしきひやくね}」

「そう、壁音ちゃんね。壁音ちゃん聞きたいんだけど、この山を下

りた近くに人里はあるかしら」

「あるよ、この先をまっすぐ下りた先を少し進んだところに」

「ありがとう、壁音ちゃん。それと、これはお詫びのべっこう飴ね」
壁音ちゃんが気絶している間に作った、大量のべっこう飴を麻布に包んで壁音ちゃんに渡してあげる。

「この甘い匂いがする綺麗なのって何？」

「べっこう飴って言うお菓子よ、甘いから食べてみて」

壁音ちゃんに教えてあげると一つ摘んで恐る恐る口に入れている。

「イブキ！これ甘いよ！こんなに貰っていいの？」

「いいのよ、それは壁音ちゃんに渡したお詫びなんだから」

お気に召したようで良かったわ。

「やった、ありがとう。」

「それじゃあ、壁音ちゃん私は人里に行くから、バイバイ」

「あ、イブキ待って」

一步を踏み出そうとしたら壁音ちゃんに呼び止められちゃった、どうしたのかしら？

「この土地を回るんだったら、この地を治める妖狐、天狐様には氣をつけて」

「ええ、分かったわ」

今度こそ人里が在る方に向かって下山を始める。

天狐、ね、どれくらいの妖怪かしら

ぬりしき
塗織 壁音

種族 妖怪（壁妖怪）

性別 女

能力 壁を動かす程度の能力

固有能力 壁を創り出す事が出来る

外見 大体15、6歳ぐらい、裾がかなり短い袂たもとの着いた灰色の着物を着ている、かなりきわどい。

髪は灰色でセミロング、身長は155ぐらい。

好きなもの 壁、壁に囲まれる事。

嫌いなもの 強い者、壁がないところ

元ネタ、普通に壁の妖怪めりかべ

イブキを襲った哀れな妖怪、イブキに遊ばれて倒された。

普段はおつむが弱いが、人間を襲う時だけカリスマ性が発揮される、がボコられるとカリスマブレイクする。

イブキにボコられても、妖怪だったという事実気付いて安心するほど、頭が弱い。

最終的にはイブキから貰ったべっこう飴で落ちた。

妖怪らしくない変わった妖怪だった、べっこう飴くれたし、とは壁音談

第十四話 第一妖怪発見（後書き）

1万PV突破記念として何か書こうと思います。

愛読してくれている方々のリクエストにお答えする形で行きたいと思いますが、まずリクエストお願いします。

例えば、○○と△△の日常とか、if話で他のアニメや漫画のキャラがイブキに会ったらか未来の幻想郷の話などといった感じに思いつく事をリクエストしてくれば幸いです。

感想にリクエストと書き込んでからリクエスト内容をあげてください。ればいいです。

なお、あげられたリクエストの中から一つだけ選びますのであしからず。

では、まて次回。

PV1万突破記念く恋色模様く（前書き）

無理矢理感が否めない。

だが後悔はしていない！

t o k k i 一兄さんからのリクエストです、どうぞお楽しみください。

PV 1万突破記念く恋色模様く

この話はユニがイブキと出会い修行を付けて貰っていた時期の話である。

今日も今日とてイブキに修行を付けて貰ったユニは村に帰り、畑仕事をしている。

そんなユニも14歳を迎えていた。

結婚適齢期を過ぎているが今のユニにとってはそれは些細な事、彼女はイブキと一緒に修行が出来るだけで十分である。

「おいしい、皆々今日はこのぐらいで止めだく」

どうやら今日の畑仕事は終わりの様だ。

「ふう、よいしょっと、あら？」

畑仕事を止めて道具を片付けようとしたユニだが、急に力が抜けた様に後ろに倒れていく。

「おっと、大丈夫か？ユニ」

倒れかけたユニを抱きとめて支えたのがユニの幼馴染のコタロだ。

「あ、ありがとう、も、もう大丈夫だから」

蚊の鳴く様な声でお礼を言いコタロから離れたユニは、顔を熟れたリンゴの様にして混乱していた。

どうしてコタロなんか抱きとめられただけで、こんなに胸がどきどきしているの？あいつの顔こんなに近くで見たの初めてかも、意外に遅しかったな、どうして、どうして……。

ユニの頭の中はその事だけが、目まぐるしく飛び回っている。

「お、おい！ユニ、お前顔真っ赤だぞ！熱でもあるんじゃないのか！？」

そう言っコタロは自分のおでことユニのおでこを合わせた。

「あうえあ！？…………むきゅく」

「おい！ユン！大丈夫か！おい！ユン！」

そしてユンは耐え切れなくなり意識を手放したようだ。

コタロは畑仕事の道具を投げ捨て、ユンを負ぶって急いでユンの家に運んで行った。

「シンさん！カヤさん！ユンが倒れた！」

「何っ！？」

「なんですって！？」

その声を聞いてドタバタとコタロのところに來た二人は軽いパニックを起こしていた。

「ユン！ユン！大丈夫なの！？」

コタロからユンを受け取ったカヤは、ユンを抱きしめながらそう繰り返すばかりで。

「何があった！何があった！？」

「シ、シンさん、落ち着いて…」

シンはコタロの肩を持ちガクガクと揺らして、コタロは揺らされ続けられて顔が段々と青くなってきている。

なに、このカオス？

それから落ち着きを取り戻した二人はユンを寝かせてコタロに謝った。

「ごめんね、コタロ君」

「すまない、取り乱した」

「いえ、俺は大丈夫なんで」

シンに揺らされ続けられていたコタロもなんとか復活した。

「すまないがコタロ君、あの人を、イブキさんと呼んでくれないか？長く生きているあの人ならユンの状態が分かるかもしれない」

「分かりました、呼んできます」

家を飛び出したコタロは全力でイブキの家に向かった。

その頃のイブキは：お菓子を作っていたりする。

「むむ！村の方で誰か私を呼んでるわ！」

お菓子作りを中断して村の方に出かけてた。

出かけたイブキと合流したコタロは急いでユンの家に戻った。

「イブキさん、どうですか？」

「うーん、特に問題はないみたいね。ただ疲れが溜まっているみたいだからしつかり休ませた方がいいわね。コタロ君、ユンちゃんが起きたら3日は修行を休みにするからって言ってね」

「はい、ありがとうございました。」

イブキの診断を聞いてホッと胸を撫で下ろした。

？何で俺はユンが、なんともなくて安心してゐるんだ？と呟きながらイブキを見送ったコタロだった。

〳五年後〵

夕暮れ時にユンはイブキの来ていた。

「イブキさーん、助けてください」

「どうしたの、ユンちゃん？」

いきなり来て助けてくださいと現れたユンに対して疑問顔を浮かべるイブキ。

「最近、コタロの事を思うと胸がキューって締め付けられるように苦しいんです。それに食事もあり食べれなくなったり、夜も眠れなくて大変なんです。これって何かの病気なんですか？」

縁側に座って話を聞いたイブキは嬉しそうに答えた。

「そうねえ、確かに病気ね。」

「そう、なんですか、病気の名前は？」

「それは“恋の病”よ」

「恋の病ですか？」

聞き慣れない言葉にユンは聞き返した。

「そう恋の病よ、ユンちゃんがコタロ君の事が好きで好きで堪らない気持ちが大きくなったから、そんな状態になっているのよ」

「そうですか、私はそれだけコタロの事が好きなんだ。」

胸に何かがストーンと落ち様に、ユンはそうなんだ、そうなんだ、と頻りに呟く。

「ユンちゃん何年前前にも同じ事言ったと思うけど、好きな気持ちはちゃんと伝えなきゃいけないわ。じゃないと他の子に取られちゃうわよ」

「そうでした！今すぐ行って来ます！ありがとうございました！イブキさん！」

イブキに言われてハッと気付いた様に立ち上がったユンは村に猛スピードで帰って行った。

「コタロ君もユンちゃんの好きみたいだけどね」

そっと呟いたイブキの言葉は風に乗って消えていった。

村に帰って来たユンはコタロ探し回った、そして村を出て少しした所にある丘の上にコタロは居た。

「コタロ！話がある！」

「そうか俺もユンにずっと言いたかった事がある」

「え？なに？」

出鼻を挫かれたユンだが、ユンにとって思いもよらないような言葉が返ってきた。

「俺はユンの事が好きだ、俺と一緒に一生を共に過ごしてくれないか？」

ユンはコタロの言葉を段々と汲み取っていき、涙を流しながら抱きついて答えた。

「私もコタロの事が好き……私もコタロと一緒に生きたい」
その言葉と共に二人は口付けを交わした。

PV1万突破記念く恋色模様く（後書き）

ユンと旦那、コタロとの関係の話でした。

最後のシーンのあとは《禁則事項です》が丘の上で行われて、その次の日には結婚した。

誤字脱字感想待ってます。

では次は本編で

第十五話 天狐（前書き）

やっぱり話の進行速度はスローリイ
…では、どうぞ。

第十五話 天狐

文明の発展した場所を探して、一年が経とうとしている。

そろそろ一度里帰りしようかしらね。

皆に定期的に帰るって約束したしね。

調査にも息抜きが必要だし、収穫が全く見込めなかったから、正直な話げんなりしていたところなのよね。

あ、でも、お菓子の布教はしっかり出来たわよ。

大体、十箇所ぐらいの村の人達に、今簡単に作る事が出来るお菓子を伝授したし、会った妖怪や襲ってきた妖怪にもお菓子を渡して、お菓子の素晴らしさを教えたりもしたしね。

私のお菓子屋さんの夢が叶う日が近いかも。

ルンルン気分で森から飛び立とうとしようした時に、目の前を青い火の玉が過ぎて行った。

「危ないわね、何かしら？」

辺りの妖気、霊気の気配を探ると妖気が感じ取れた。

これは私と同じ様に妖気を抑えている感じね。

「貴様か、最近俺の縄張りを好き勝手している妖怪は」

現れて来たのは尻尾が九本ある巨大な妖狐、これが前に壁音ちゃんと言っていた天狐ってヤツかしら。

「好き勝手にしているつもりはないのだけれど、ただお菓子を広めてるだけよ」

「しらばくれるな、俺の配下の妖怪達が貴様を慕い始めているんだぞ。そやつらから貴様の容姿は聞きだしているんだ。」

「それなら私をどうするのかしら？」

「ここで消えてもらう！」

その巨体から繰り出された爪撃は速くて何だか危なさそう、抑えている妖力を周りに影響が出ない程度に一気に開放して、爪撃が当たらない範囲まで移動して、爪撃が通った所を見ると広範囲が抉れて

いた。

「ちょっと！危ないじゃないの！怪我でもしたらどうするのよ！」

「それが、貴様の本当の力か…」

少しは怯んだ様だけど引いてくれそうになさそうね、炎鬼君と同じぐらいの胆力は在るみたいね。

妖力の方は炎鬼君以上あるみたいだし、これは面倒そうね。

妖力を全開放してもいいんだけど、私が全開放すると妖力が濃すぎて、妖力が瘴気になまって環境を破壊するから使いたくないのよね。遙か昔に妖力を垂れ流しにしていた時に、一度だけ私の妖力が瘴気になって土地が侵されたのよね、それで土地が生き返るまで千年ぐらい掛かったから同じ過ちだけはしたくないのよね。

「違うわよ、上げようと思えば、まだ妖力は上げれるわよ」

「なん…だと…」

妖狐の顔が絶望の色に染まっていく。

「貴方ぐらいの妖怪なら実力差は分かるわよね？それに私は争い事は嫌いなものよ、出来れば引いてくれないかしら？」

色々と葛藤があるのかしら？すごく難しそうな顔をして考え込んでいるけど。

「分かった…ここは引こう、だが…」

よかった、引いてくれるのね、だけど何かありそうな感じね。

「俺の住処に来て話を聞かせて貰うぞ」

「それぐらいならいいわよ、それで貴方の住処はどこなの？」

「案内するより、俺の背に乗って運んだ方が速い、だから背に乗れ。あとその妖力を抑えてくれ、薄ら寒くてかなわん」

妖狐に言われて慌てて開放していた妖力を抑えた。

「…これで、いいかしら？」

「それでいい、俺の背に乗れ」

それじゃ、遠慮なく…うわあ、この子の背中もっふもふで気持ちいい！

ふっと視界に入った九本の尻尾…あ、ああ、ああああ、もっふ

もふで気持ち良さそう！ギュッてしたい！でも我慢よ、イブキ！あの尻尾はこの子の住処に着いてからよ！

「動くぞ、しっかり掴まっている（一瞬寒気が走ったが何だ？）」

九尾移動中……

妖狐の住処（洞窟）に着いてから事情を説明したら、案外あっさりと認めてくれた。

あ、あとこの子の名前は天狐てんこ 光幻こうげんこの地の妖怪を束ねる妖怪の長をやっているみたい。

それで、今光幻ちゃんは人の姿を取って、私と談笑なんかをしている。

そんな光幻ちゃんの容姿は一言で言えば美人さんなのよね。

頭に付いてるキツネ耳とか背中の方から見え隠れする九本の尻尾がとっても可愛いものよ。

「そうかそうか、イブキは人妖郷じんようきょうの長だったのか」

「人妖郷が何なのか分からないけど、私が見守ってきた人里は人も妖もどちらも友好的ね」

あの里は周りからは人妖郷なんて呼ばれてるのかしら？
あまり外に出なかったから分からないわね。

「イブキの居た里は人妖郷で合っている筈だ。俺が持っている情報と能力を使って調べたんだ。……場所は大体大陸のこの辺りだ」

ガリガリと簡易的な大陸を描いて里が在る辺りをぐるりと囲った。
合ってるわね、よくもまあ、この離れた土地から調べられたわね。

「うん、確かにその辺りに在るわね。でも、人妖郷なんて呼ばれてるなんて知らなかったわ」

「その里の噂を聞いているぞ。襲ってきた妖怪を倒し、その後には治療をして逃がしたりしているそうじゃないか。信じられないんだが、

何でも元鬼の四天王の炎鬼がその里に居るらしいという噂を聞いたが本当か？」

「炎鬼君なら私の所に居るわよ。今は私が居ない代わりに里を護ってくれてるわね」

「あの四天王最強と言われた炎鬼が人間を護っているのか……」

炎鬼君の話については気になるけど……話しも落ち着いた事だし光幻ちゃんの尻尾をモフりますか。

音もなく光幻ちゃんの後ろに立って、いざ！

「ひゃ！イ、イブキ止めろ！んん！尻尾、を、ひゃう、掴むな！ああ！………」

・
・
・
・
・

小一時間ぐらい光幻ちゃんの尻尾をモフっていたら光幻ちゃんが気絶しちゃった、どうしようかしら……

後が怖いからお詫びを置いて逃げようかしら、そうしよう。

水飴が入った壺を光幻ちゃんの傍に置いて、起きないうちにそそくさと逃げる様に私の里、人妖郷に向けて飛び立った。

天狐 てんこ 光幻 こうげん

種族 妖怪（妖狐）

性別 不明（男女どちらにも変化でき、長い歳月を過ぎしてきた為に忘れてしまった）

能力 視通す程度の能力（作中では語られなかったが、一種の千里眼）

外見 大抵は狐の姿で過ごしている。

必要であれば人型の姿を取る事もある、その姿は誰もが振り返る程の美女、美男である。

女性時の外見は身長は170前後、胸は大きくも小さくもない標準サイズの美乳タイプ。

髪は背中の中程まである金髪、そして頭には狐耳がある。

服装は赤い袴をはいた巫女スタイル。

男性時の外見は身長が180を越えている。

髪は肩口辺りでまである金髪、やっぱり頭に狐耳。

体の方は程好く鍛えられた位の筋肉つき、所謂細マッチョ。

服装は女性時と大体同じで袴の色が藍色である。

好きなもの 自分の縄張り、能力で視る風景

嫌いなもの 縄張りを荒らす者

今で言う九州地方を治める大妖怪。

気紛れに人間を襲ったり、助けたりして日々を過ごしている。

この事で人間達の間では気紛れ天狐と呼ばれているが、本人はまったく気にしていない。

イブキに挑むが妖力を開放したイブキとの力の差を理解してすぐに降参した。

第十五話 天狐（後書き）

……イブキひどい
どうしてこうなった

第十六話 帰省……どうしてこうなった？ (前書き)

ども、最新話です、どうぞ。

第十六話 帰省……どうしてこうなった？

光幻ちゃんを気絶させてから逃げる様に、私の里とも呼べる人妖郷に帰って来た。

先ずは、里の人達に帰って来た事を教えてあげなきゃね。

私がこうして里に挨拶に行くのは里の人達と仲良くなったからで、その仲良くなったのがユンちゃんに修行を付け始めた時位かしら？大体、その時位に里に姿を隠さずに里に行くようになったのは。そこから何年か掛けて仲良くなったのは、それでいつの間にか私の呼び方がイブキ様になっていたのはよく分からないのよね。

様付けになったのが、確かメイちゃんが私のところで修行を始めたときだったかしら？

その辺りで、まずメイちゃんが様付けで呼び出して気付いた時には里の人全員が様付けで呼ぶようになってたわね。

私も初めの方は様付けは止めてって言ってたけど、もう慣れて違和感がなくなってるわね。

里に一步、二歩と入るとすぐに声を掛けられたわ。

「あー！イブキ様だ！」

里の出入り口辺りで遊んでいた子供達が私を見つけて集まって来た。

「ねー！ねー！イブキ様、どこに行ってたの！」

「イブキ様！お菓子ちょうだい！お菓子！」

「イブキ様、遊んで」

「……おかし」

子供達に囲まれて、右へ、左へと引っ張られてしまっている。

元気がいいのは良い事だけど、ちょっと元気すぎるわね。

「はいあい、皆落ち着いてね、お菓子もあげるし、一緒に遊んでもあげるから、ね」

「「「「やったー！」「」「」」」

作り置きしておいた飴ちゃんを皆にあげて、それから子供達と一時

間ぐらい遊んでいると里の大人達が私に気付いて、また子供達にされた様に囲まれて大変だったわ。

それで何故か宴会を開く事が決まった時に、多分修行をしていたユンちゃん、メイちゃん、あと黄金ちゃんが凄い勢いで私に突貫して来て、抱き付くというよりタックルして来たと言わんばかりの勢いだったから受け止めきれずに吹き飛ばされたわ。

流石に三人同時に来たのは受け止めきれないわ。

ユンちゃんと黄金ちゃんは走って来ていたけど、妖怪である黄金ちゃんの走る速度は言ってしまうえば100メートルなんて一息で走り抜ける速度なのよね。

それで、その速さについて来れるユンちゃんって……深く考えない様にしよう。

メイちゃんは飛んで来たんだけど、やっぱり二人と同じスピードで飛んで来たから三人に抱き付かれた時の威力は凄まじかったわ。

あまりの威力に10メートル以上吹き飛ばされたわね。

その後は三人が平謝りしてきたり、後から来た炎鬼君に何故か謝れたりもした。

またその後にユンちゃんと黄金ちゃんに引っ張られて私の家に連れて来られた。

そこからは会ってなかった分を取り戻す様に宴会の時間まで、ずっとお喋りをして過ごしたわ。

でも、あっちに居た時の話で光幻ちゃんと壁音ちゃんの話をした時に、ユンちゃんと黄金ちゃんがとても怖かったわ。

だって二人とも修羅の様な顔になってたから。

「その駄妖怪と駄狐殺ってきますね」なんて言って霊力と妖力を全開にして、今にも飛び立とうとする二人を私と炎鬼君とで、なんとか二人を抑える事に成功したのよ。

それで、二人を落ち着かせて里の宴会場に来てから二人とも浴びる様にお酒を飲んでいるのよね。

「ねえ、二人とも、もう少しお酒を控えたらどうかしら？ ほら料理

だってこんなにあるのよ。」

ユンちゃんと黄金ちゃんに料理を盛ったお皿を渡してあげる。

「なんれすか、いぶきちゃん！わらひは、もうろまらきややつれいけないろれす！」

受け取った料理はしっかりと食べながら反論してきた：行儀が悪いわね。

「そうれすよ！そろだぎつねと、だようかいがやれらいろらったら、ろむしからいららいれすか！」

……二人とも呂律が回ってないわね。

これは相当酔ってるわね。

「ほら、二人とも、その辺で止めときなさい」

「「いやれす！！」」

お酒の入った入れ物を抱きかかえる様にして拒まれてしまった。

炎鬼君にどうにかならないかと視線で聞いてみても、好きな様にさせろという視線が帰って来た。

どうしよう……

「炎鬼くなに私のイブキちゃんとみつめあつれんら？あゝあゝ？」

とうとう黄金ちゃんが炎鬼君に絡み出してしまった。

「偶々、目線が合ったただけだろう？お前が気にする様な事じゃないだろう」

「大有りだ！このクソ野郎！」

“ドゴン”

「ぐおおおお……」

“ドサ”

不意打ち気味のボディブローで炎鬼君が沈められてしまったわ。

それに何時もの黄金ちゃんじゃない。

「これで邪魔者は居なくなりました、さあイブキさん飲みましょう」
酔いが少し冷めてきたのか黄金ちゃんの呂律が直ってるけど目が据わってて怖いわ。

周りを見渡して助けを求めても、里の人達はもうとっくに避難して

るし、ユンちゃんは何時の間にか酔い潰れてて旦那さんが連れて帰
ってるし……

逃げ場なしなの！

黄金ちゃんはずいずいと炎鬼君の瓢箪から出したお酒が入った杯を
私に近づけてくるし、大体私はお酒は飲みたくないのよ、嫌な予感
がするし……

もう！どうなってもしらないわよ！

黄金ちゃんから杯を受け取って、それを一気に煽り飲み干した所で、
私の意識は闇に沈んでいった。

（翌日）

うゝ頭痛い……

あれ？ここ私の家だ……

私家に帰って来た覚えはないんだけど……

昨日は確か宴会があつて、それで怖くなった黄金ちゃんからお酒を
貰って飲んだ後の記憶がないわ。

取り敢えず、お味噌汁作って飲もう。

布団から出て……

「って、何で裸なの？」

私脱ぎ癖なんてないのに……寝る時だって服は着て寝る派なんだけど
……こういう事かしら？

部屋を見渡すとあちこちに私の服や下着が散らばっていた。
服を着ようと思い立ち上がろうとしても腰に力が入らない。

うそ！？腰が抜けてる！？なんで！？

と、取り敢えず下着だけでも履かなきゃ。

ごろごろ転がって下着を回収して、下着を着けて布団を体に巻いて
出来上がり。

これであまり恥ずかしくないわ。

どうしてこうなったか考えている所に炎鬼君が尋ねて来た。

丁度いいからあの後どうなったか聞こう。

「ねえ、炎鬼君私がお酒を飲んだ後どうなったの？」

「黄金の奴にやられてから気が付いた範囲でいいならな」

「おねがい」

「後悔だけはするなよ」

後悔って何を後悔するのかしら？

「俺が気が付いた時にはイブキの家、この部屋に裸で転がされてい
たんだ」

へ？なんで炎鬼君が裸で？

「それで辺りを確認してみれば不敵な笑みを浮かべている裸のお前
が居たんだ」

なんで私も裸なのー！？

「そして、俺でも振りほどけない様な力で、俺を押さえつけてお前
は俺と交わったんだ」

うそ……炎鬼君と私が交わった……？

しかも私が炎鬼君をレイプする様な形でだなんて……

責任取らなきゃ……

side 炎鬼

俺が昨日の出来事を話し終えたらイブキは深刻そうな、思いつめる
様な顔をして口を開いた。

「炎鬼君、私を炎鬼君の妻として迎えてくれますか？」

正直俺はイブキの事が好きで、願っても見ない事だが、これで俺が承諾したらイブキは俺の妻になるんだろうが、それはイブキが本当に望んでいる事なのか？

イブキの事だ、どうせ私のやった事の責任は取らなくてはとか考えているんだろう。

「イブキ、それは本心から言っている事なのか？」

「そうよ。私は炎鬼君の事は嫌いじゃない、むしろ好きよ、あ…あうう」

そう言っって顔を真っ赤にして布団に顔を埋めてしまった。

「そうだな、俺もイブキの事が好きだ」

言っってなんだが、かなり恥ずかしいな。

「だから責任とか関係なく俺と番い（つがい）になって欲しい」

「はい、不束者ですがよろしくお願いします」

その日から俺たちは夫婦となった。

数日後、この事を知ったユンと黄金に殺されかけたのは言うまでもない。

あのイブキ信者共め！

第十六話 帰省……どうしてこうなった？（後書き）

どうして、どうしてこうなったんだ！

書いてるうちにテンションがおかしくなって気付いたらこうなった。
反省はしているが後悔はしていない。

誤字脱字、感想があればお願いします。

第十七話 穏やかな日々（前書き）

更新が遅くなってすみません。
リアルが忙しくって・・・
では、どうぞ～

第十七話 穏やかな日々

私と炎鬼君が夫婦になってから三十年余り、この歳月で私にも子供が出来た。

名前は伊吹 焰華、私と炎鬼君の自慢の鬼の一人娘。

この子には私と炎鬼君にはない姓を付けた、姓を伊吹にしたのは炎鬼君が、私が祖である証として付けて、焰華と言う名前は私が付けた。

この焰華と言う名前には炎鬼君の様に強く、そして美しくなる様に付けた。

この子が産まれてからもう三十年近く経つのね、まさかあの一回で出来るなんて思いもしなかったわ、それも今となってはいい思い出ね。

「お母さーん！」

黄金ちゃんと川遊びをしている焰華が無邪気に手を振っている。

「気をつけて遊びなさいよ」

「はーい」

注意をしながら手を振り返す。

黄金ちゃんが居るから心配は要らないだろうけど。

ああ、そうそう、調査の方はこの人妖郷から西側はすべて終わったわ。

これも光幻ちゃんから能力を複製させてもらったおかげね。

光幻ちゃん的能力、視通す程度能力は調査するのには重宝したわ。視通す程度能力はそれなりの距離が初めから視る事が出来たから色々楽しかったわ。

焰華が産まれて二年ぐらいいは育児に追われて調査に行けなかったし、その後だって焰華からあまり離れたくないから、ほぼ日帰りで調査に行ってたしね。

そうそう、中国地方になる辺りを調査した時に鬼が沢山居たのよね、

炎鬼君に聞いたら生まれ故郷だとか。

その炎鬼君の故郷で鬼の頂点に立つ鬼神と仲良くなったわね。

鬼神、雷鬼君は炎鬼君とは幼馴染みで、二人は肩を並べる強さだったみたいけど、炎鬼君が全国武者修行の旅に出て行った後に鬼神になったらしい。

なんでも炎鬼君が旅に出なければ鬼神になってたのは炎鬼君だったらしい、旅に出る時は二人とも鬼の四天王だったみたい。

それで私達一家がそこに行ったら大変歓迎されたわね・・・その話はまたの機会に話すとしましょう。

で、西側には特に文明が進んでいる地域はなかったという事よ、後は東側を調べたら終わりね。

閑話休題

川魚を手で取ろうとしたり、黄金ちゃんと水のかけ合いをしている焰華を見ていると、微笑ましくてつつい頬が緩んでくるわ。

やっぱり、お腹を痛めて産んだ子は可愛いのよね。

けどこの子が産まれて三十年近くが経つけど、まだ八歳ぐらいの姿なのよね：やっぱり妖怪は成長速度が遅いのかしら？

今のこの子の姿はパツと見は鬼には見えないけど、髪に隠れて小さい角が二本生えていてそれが可愛いのも、髪の色は私の黒髪と炎鬼君の赤髪の色を混ぜ合わせたような色になっていて、光に当たると真紅色に見えて綺麗なのよね。

髪の長さは私と同じ様に長く伸ばしていて腰辺りまである。

性格も純真無垢、天真爛漫の甘えん坊な元気で可愛い私の娘。何をしても焰華は本当に可愛いわね。

今だって川魚を上手く捕まえなくて剥れているけど、ホントかわいいわあ。

「黄金お姉ちゃん、上手く捕まえないよう」

「あはは、焰華ちゃんこうやって、シュバってやって捕まえるんだ

よ」

黄金ちゃんがお手本として素早く手を動かして川魚をその手に捕まえて見せている。

「うう、私、黄金お姉ちゃんみたいに出来ないよう」

「何事も挑戦し続けなきゃ出来るようにならないよ、私だってこんな風に捕まえられる様になるまで練習したんだよ、だから焰華ちゃんも沢山練習して出来る様になろうね」

「……うん」

黄金ちゃんもしっかりとお姉ちゃんしてくれてるから、私も安心して黄金ちゃんに焰華を任せていられるのよね。

にしても、黄金ちゃんお姉ちゃん役が板についてるわね。

焰華が物心ついた辺りから面倒見てもらってるからってのもあるけど、黄金ちゃんが何時の間にかそういうポジションになってたのよね。

えいっ！えいっ！て魚を捕まえようと奮闘している焰華を眺めながらお昼ご飯の準備をしていこうかしらね。

焰華と黄金ちゃんが魚を取ってくれてるから焼きましょうかね。

丁度いい長さの枝を拾って妖力で作った刃を使って枝の皮を剥いで枝の先を尖らせて、はい、串の出来上がり。

出来た串を持って川で洗いながら二人に声を掛ける。

「そろそろ、ご飯にしましょうか？」

「そうですね、焰華ちゃんご飯にするよ」

「はーい」

川の中に石で囲いを作って魚を入れてる所を見ると、えーと十匹いるわね。

「黄金ちゃん何匹ぐらい食べれる？」

「そうですね、四匹はいけますね」

私と焰華は二匹ずつあれば大丈夫ね。

「そう、わかったわ。それと悪いんだけど、焰華を連れてある程度枝を集めという貰えないかしら？」

「お安い御用です！焰華ちゃん行こうか？」

「うん！」

私も焼き魚の準備を進めていく、まず枝を必要分複製して、次に魚の鱗をパパッと取って内臓を取り出して、川で血を洗い流して串に刺して軽く塩をまぶして出来上がり。

これを繰り返して全部の魚を後は焼くだけの状態にして二人の帰りを待つ。

少し待っていると二人は返ってきた。

「お疲れ様、枝はそこに置いてちょうだい」

「えいや！」

「ここでもいいですか？」

私の指差した所に焰華は抱えていた枝を投げるように置いて、黄金ちゃんはそのと焰華が投げて置いた所に枝を置いてくれた。

「ええ、いいわよ。後は私の方で準備するから二人は川で手を洗ってきてちょうだい」

「うん！」

「わかりました」

二人が手を洗いに行っている間に、枝を空気が入る様に積み重ねて妖力で火を出して枝を燃やしていく、燃え始めたらさっき用意した魚を周りに刺して焼き上がるのを待つ فقطと。

「お母さーんただいまー！」

帰って来た焰華が突進紛いに抱きついてきた。

「くふっ！」

くくくっ！鳩尾に入った、これは効くわね。

「えへへ」

天使のような笑顔で私を見上げる焰華に胸キュン、痛みなんてこの笑顔を見たら忘却の彼方飛んでいくわ！

「さ、焼けるまで座って待ってましよう」

「はい」

「私はーお母さんの膝の上ー」

火をはさむ様に座って膝の上に座った焰華の頭を撫でる。
撫でながら、ふと思った事を口に出してみた。

「そういえば、焰華、能力の制御はちゃんと出来る様になったの？」
「ちゃんと出来ようになったよ！見ててね！お母さん！」

そう言っただけで焰華は立ち上がった私と黄金ちゃんが居る所へ移動して両手を広げてポーズを取った。

「いくよ！」

掛け声と共に両手に青い炎を出して、円を描く様にゆっくりと回りながら空中に何個も炎を浮かべて、だんだん円が小さくなってその場でくるくる回る様になった時には周りに浮かぶ炎は大体三十ぐらしかしら。

「集まれ！」

回るのを止めて右手を掲げた焰華がそう言うのと、周りに浮いていた炎が焰華の掲げた手に集まってきて大きな炎になった。

「圧縮！」

その言葉と共に炎がどんどん小さくなっていった焰華の頭ほどの大きさになった。

暫くするとポツと音を出して炎が消えた。

「どうだった、お母さん！すごい？」

私の膝に座りなおして無邪気に笑いながらそう聞いてきた。

「すごいわよ、何時の間にかここまで出来るようになったの？」

「えへへ、メイさんにたくさん見てもらった出来たよ」

「それじゃ、次に会った時にお礼言わなきゃね」

「うん！」

焰華の頭を優しく撫でて魚の焼き具合を確認してみると、そろそろいいかしらね？

「黄金ちゃん、そろそろ食べれそうよ」

「そうですか、それでは頂きます！」

焼き立てだから一口かじっては、はふはふしながらも食べていく黄金ちゃん。

冷ましてから食べればいいのに：

私も食べようかしら。

「はい、焰華。熱いから気を付けて食べるのよ」

「うん」

ふーふーしてから熱くないかどうか恐る恐るかじっている焰華の姿は可愛いわあ。

私も冷ましてから一口食べてみる、程好く塩が効いていて美味しい。願わくばこの平穏が続く事を願うわ……だけど、何故だかそれはあまり続かない気がするわ。

イブキ能力追加

ありとあらゆるものを複製する程度の能力

近寄らせない程度の能力（複製）

New“視通す程度の能力”（複製）

イ吹 いぶき 焰華 えんか

種族 鬼

性別 女

能力 焰を操る程度の能力（炎鬼の能力より上位級）

外見 見た目は八歳位、身長は130cm程度、頭の左右に髪に隠れるほど小さな二本の角が生えている。

髪の色は黒が強い真紅色、長さはイブキと同じ位に伸ばしている。

服はイブキの服に似たような黒色のワンピース（この服はイブキが試行錯誤しながら糸から織って作った服）

好きなもの イブキ、炎鬼、黄金
嫌いなもの 特になし

イブキと炎鬼の間にできた一人娘。

性格は純真無垢、天真爛漫で誰とでも仲良くなれる様な性格をしている。

そのため人里にもよく遊びに行っている為に人里の人達にとっては一種の癒しのアイドル的存在になっている。

第十七話 穏やかな日々（後書き）

イブキと炎鬼の愛娘登場！

イブキは親馬鹿スキルを手に入れた

第十七・五話 炎鬼の里帰り（前書き）

だんだん更新スピードが落ちてくる・・・
では、ゆっくりしていつてね！

第十七・五話 炎鬼の里帰り

今日、私達一家は鬼の住処まで来ていた。

何で来たかと言うと焰華のお披露目と炎鬼君の里帰りの為ね。

「おー、イブキよー来てくれたなあ、炎鬼も久しぶりやないか」
今出迎えてくれたのが鬼の総大将である鬼神、雷鬼君。

炎鬼君と雷鬼君は拳をぶつけ合って再会を喜んでるわ。

「それで、その娘がイブキと炎鬼の娘なんか？」

雷鬼君が私の後ろにしがみ付く様に隠れている焰華を見てそう言うてくる。

「ええ、そうよ。ほら焰華、雷鬼君にご挨拶は？」

焰華を雷鬼君の前に出して挨拶をする様に言う。

「伊吹焰華です。よろしくお願いします、雷鬼おじちゃん」

「お、おじちゃん……」

「よく出来たわね、焰華、えらい、えらい」

焰華の頭を撫でながら褒めて上げると、えへへ、と笑ったわ。

もー、焰華は可愛いなあ、思わず抱き締めてしまったけど仕方ないわよね。

視界の隅でorzになっている雷鬼君が見えたけど気もならないわ。

「………わいは、おじちゃんやないんや、まだ兄ちゃんや」

「クククッ、元気出せ、おじちゃん」

「・・・何ゆうとんや、炎鬼。わいがおじちゃんならお前もおじちゃんやないか」

「何だと……」

「そもそも、わいとお前は同じ年で幼馴染やないか！せやからおじちゃん決定や！」

「俺はまだまだ見た目は若い！」

「お前がそーゆんなら、わいかて若いわ！」

「「ああ？」」

「やんのかいな？」

「上等だ！」

「あら？二人とも何処行ったのかしら？」

気が付いたら二人とも居なくなっていて少し驚いたわ。

離れた所で轟音が響いてるみたいだけど何なのかしらね？

気にしないで先に進みましょうか、前に来た時の事を思い出しながら、皆がよく集まって居る所、宴会場に向かう事にするわ。

「さ、焰華、行くわよ」

焰華の手を握って宴会場に向けて歩き出す。

「……お母さん、お父さんと雷鬼おじちゃんいないけど、どうするの？」

「あの二人なら大丈夫よ、先に行って待ってましょう」

「うん」

それで宴会場に着いた訳だけど、凄なお酒のにおい。

一人の鬼が私たちに気付いたみたい

「ん？あ！イブキだ！」

「え？イブキ！？」

「イブキ、キター」

「すっげえ！イブキだ！」

「幼女もいる！」

「幼女、キター！」

え？なに、このカオス？歓迎されてるの？

あと、最後の二人は焰華に近づかないでよね。

一通り騒いだ鬼達は何事も無かった様に宴会の準備を شدしたわ。
本当に何だったの？

そして宴会の準備が終わりそうな時に炎鬼君と雷鬼君がボロボロになって帰って来た。

「腕は鈍ってないようやな」

「当たり前だ、お前の方こそ鈍ったんじゃないか？昔より強いとは思わなかったが？」

「そんな事はない、わいかてつよおなっとる」

「そうか…」

二人とも何してたのかしら？ケンカか何かかしら？

「二人とも何処に行ってたのよ、待ちくたびれたわよ」

「む、スマン、イブキ」

「いや、堪忍なイブキ。少し炎鬼と友情を深めとったんや」

「そうだったの」

「そういや、焰華ちゃんどこにいったんや？」

雷鬼君が焰華の姿を探す様に、キョロキョロと見回している。

「焰華ならあそこよ」

女の鬼が集まっている所を指差して場所を教えてあげる。

「イブキ、焰華は大丈夫なのか？」

炎鬼君がソワソワしながら聞いてきた。

「皆には焰華と仲良くして貰ってるから大丈夫よ」

「そ、そうか…」

私がそう言っても落ち着かない様子の炎鬼君。

そんな中に焰華と遊んでくれていた一人の鬼がこっち来たけど何だか様子がおかしいわね。

「イ、イブキ、あの子貰ってもいい？」

荒い呼吸に鼻血まで出してそんな事を言ってくれたわ。

「「ダメよ（だ）！」」

「ダメに決まっとるやろが！ドアホが！」

私達の拒否の言葉の後に雷鬼君がその娘に拳骨を落として説教が始まった。

「~~~~~！大将、痛いよ！」

「痛くなる様に殴ったんやから当たり前や、大体なあ、あの二人の子供を貰ってもいいなんて言っとんやない。それにお前はいい加減その幼女趣味を治せや」

「それは出来ないよ！」

「お前なあ。わいらの取り決めで人間の女、子供は攫ってこないって約束なのに気付いたら幼女を攫ってきとるやないか。元の場所に返すわいらの気にもなってみい」

くどくどくどくど、宴会が始まるまで雷鬼君の説教は続いた。

side 炎鬼

「イブキ、分かってはいると思うが、絶対に飲むなよ。お前は酒癖が悪いんだからな」

「分かってるわ、だから甘酒を持参して来たんじゃない」

イブキの酒癖の悪さは俺が身を持って体験済みである。

役得ではあるが、手が付けられんのが難点だな。

「あと焰華には鬼の酒はまだ早いだろうから、飲ませていいのは甘酒だけだぞ。」

「ええ、それも分かっているわ。焰華も分かったわね」

「ええ、私もお父さんと同じの飲んでみた」

「ダメだ、焰華には10年早い、それで10年経てば飲んでみてもいいぞ」

「てことは、炎鬼の奴が一服盛ったか」

「炎鬼、恐ろしい子」

何だか話の方向が怪しくなってきたな。

“くいきい”

服を引っ張られたからそっちの方を見ると焰華が居た。

「どうしたんだ？ 焰華」

「お父さん、お母さんがなんだか変なの」

変だど？ まさか甘酒以外を飲んだのか？

「えへへ、えんきくくん♪」

「おっと」

抱きついてきたイブキを抱きとめる。

どうやら酔っているみたいだな、甘酒で酔ったのか？

「焰華、お母さんは大丈夫だ。寝て起きたら何時ものお母さんに戻
ってるだろうから」

「ほんと？」

「ああ、大丈夫だ」

焰華を安心させる様に頭を撫でてやる。

「あ！ 焰華だけ撫でるなんてずるい！ 私も撫でてよ！
親としてどうだとは思うが、こればかりは仕方がない
イブキが満足するまでイブキの願い通りの事をしてやる。

「あれがイブキだと！？」

「炎鬼のあんな優しいような顔見たことねえぞ！」

外野が五月蠅いが聞こえない。

イブキが酔い潰れて、眠るまで続いていた事をここに記す。

種族 鬼

性別 男

能力 雷を操る程度の能力

外見 金髪で肩に掛かる程度には長い、額には黄色い角が一本ある。

身長は170程で鬼の中では平均以下。

身体つきは炎鬼と同じく無駄のない筋肉がついている。

服装は黒い着流しに黄色の雷を表す様に刺しゅうがいくつ
かしてある。

好きなもの 強者、戦い、宴会、酒

嫌いなもの 嘘、裏切り

何故かエセ関西弁を使う、いつもお気楽な口調で話すから鬼の大将
としては見られにくい。

いざ戦いとなれば鬼神としての本領を発揮する。

炎鬼とは幼馴染であり時にライバルでもあった。

第十七・五話 炎鬼の里帰り（後書き）

17話と18話のあいだの閑話です。

誤字脱字、感想があれば気楽にどうぞ。

次回で進展があります。

では次回！

第十八話 崩壊は唐突に…（前書き）

この話で状況が変化していきます。

更新ペース遅い…orz

では、どうぞ

第十八話 崩壊は唐突に…

調査が終わって100年ぐらい経ったわ。

調査の結果は東の地方の一地域が他の村や集落と比べると、格段に時代が進んでいた様に思える。

この人妖郷も私のお陰で他の所と比べると進んでいるけど、あそこは更に進んでいたわね。

クロウには取り敢えず連絡はしたけど、そこまで問題視しないで済むだろうって返ってきたわ。

それで今はのんびりと過ごしているわ。

そうそう、十年ぐらい前から人里の出入り口辺りに私の念願のお菓子屋さんを開いたわ。

お店の名前は何の捻りもないけど夢菓子屋ゆめかしやって名前よ。

お店を出しても収入という収入は無いんだけどね、そもそも私達妖怪が人里を広範囲を囲む様に住んでるから閉鎖的になった此処じゃあ通貨なんて無いし、大体物々交換が主流になっている。

ま、私は基本的に好きでやってる事だから、食べたいって来てくれた子には無償で上げてるんだけどね。

後は焰華と黄金ちゃんが此処を手伝ってくれてるのよね、何度か私に構わずに焰華と黄金ちゃんの好きな事すればいいのよって言ったけど、その度に断られているのよね。

私としては助かるんだけどね、私一人だと手が回らなくなる事があるから大助かりなのよ、それで二人には頭が上がりなくなりそうなのよね。

あと、変わった事と言えば黄金ちゃんが山を二つぐらい創って、この人妖郷を囲って守る様な状態になっているのよ。

その内の一つに此処に移り住んできた天狗達の住処すみかになっているわ。天魔率いる天狗達は独自の社会構成を作っていて、此処でのルールもちゃんと守っている。

それに外から来る妖怪や人間の警戒などもしているみたい。

それで人妖郷の隅の方を警戒している天狗達からの報告で、偶に人間に傷つけられた小中妖怪が此処に逃げてくるらしいのよね。

それも霊撃とかで傷ついたじゃなくて、何て言うのかしら近代的な傷、銃創みたいのやら爆撃を受けた様な傷なのよね。

流石に何らかの対策を取らなくちゃまずいかしら？

「イブキ様、今度の人妖郷決闘大会についてお話があるんですけど、今いいですか？」

「ええ、いいわよ。ちょっと座って待っててね。」

「はい」

今尋ねて来たのがウンちゃんの家系の現役の巫女、神楽ちゃん―巫女って言葉は何時の間にか出来ててそう呼ばれるようになった。

それで人妖郷決闘大会って言うのが、妖怪の力が落ちない様に定期的に開かれるイベント。

一年の間に四回、季節の変わり目に行われる。

人と妖怪が対等に戦える様に特殊な結界を敷いてその中とする決闘方法。

その結界の中でなら決して大怪我をしないという仕様。

それで神楽ちゃんが尋ねて来たのは、恐らく今回の大会の景品を何にするかを決める為よね。

羊羹とお茶を持って神楽ちゃんのところに戻る。

「あ、焰華これから少し神楽ちゃんとお話があるからお店お願いね。」

「はい」

焰華にお店を任せて神楽ちゃんのところへ改めて向かう。

「はい、お待たせ、神楽ちゃん」

「すみません、イブキ様。それで今回の人妖郷決闘大会についてですけど、これが今回の出場者名簿です。」

「どれどれ、えーと参加人数が30人で、肉弾戦が13人で、弾幕戦が17人ね。分かったわ、これで人数は揃えておくわ。それで景

品の方はどうなの？」

「はい、今回はいい酒が出来たという事でお酒です」

人妖郷決闘大会の基本は肉弾戦と弾幕戦の二つの部門で構成されている。

偶に二つを合わせた混合型もすることもあるわね、これは実力者、大妖怪クラスや巫女クラスの戦いでよく使うわね。

ああ、言い忘れてたけど人妖郷の人達の大半は、霊力や気を使える様になっているからこんな大会が開かれるのよね。

「そう、こっちはいつも通りに労力の提供でいいかしら？」

「はい、それをお願いします」

打ち合わせもそこそこに終わらせた、神楽ちゃんは羊羹を食べている。

「ん~~~~♪イブキ様の作るお菓子は何時食べても美味しいですね」

「うん？そう、よかったわ」

やっぱり自分で作った物を美味しく食べて貰うのは気持ちがいいわ。
「あ、でも前に一度食べさせて貰った“けーき”って言うお菓子の方が私は好きです。」

「それなら今度作ってあげるわよ」

「え！本当ですか！ありがとうございます！」

本当に嬉しそうな顔をして喜んでいるわ。

こんな顔を見る為に私は今の今まで頑張ってきたのよね。

・
・
・
・
・
・

人妖郷決闘大会まで、後数日というところで事件は起きた。

「イブキ様！西の妖怪達が此処に向かって来ています！どうすればいいですか!？」

「取り敢えず、落ち着いてね。はい、お茶」

慌てながら来たこの子は烏天狗の椿ちゃん（うてんぐ）、この子も何人もいる哨戒天狗の一人で天狗の中で最速の速さで飛ぶ事が出来る、能力は風を操る程度の能力。

「ありがとうございます！んぐ、んぐ、んぐ、ぷはあ」

どうやら落ち着いてきたみたいね。

「それで此処に向かって来ている妖怪達の数と種族はどうなの？」

「はい、それが軍勢と言っても差し支えない様な数で、軽く千は居ると思われます。それで種族なんですけど多種多彩の妖怪達でこの大陸の一角を治める鬼達とそれの配下の妖怪、更にその鬼と肩を並べる九尾まで居て、その九尾も配下の妖怪を引き連れて此方に向かってきています」

あゝ、それって光幻ちゃんと鬼神の雷鬼君じゃないかしら？

一体どうしたのかしら？

「椿ちゃん、多分大丈夫よ。その鬼達と九尾は私の知人よ。」

「ええ！？そうなんですか！？」

私がそう言うのと椿ちゃんは目をまん丸にして驚いている。

「そうなの、だから案内よろしくね」

「は、はい、こっちです」

空を飛んだ椿ちゃんに合わせて私も飛んで案内について行く。

・
・
・
・
・

人妖郷周辺を囲む様に在る山を、出るか出ないかぐらいの範囲に降り立って様子を伺う。

「取り敢えず、大丈夫だと思うけど椿ちゃんは離れててね」

「はい、分かりました」

ぴゅう、っと安全な所まで飛んで行った椿ちゃんを見送って、此方

に向かって来ている妖怪達を『視通す程度の能力』で確認する。

やっぱり、光幻ちゃんに雷鬼君が居るわね、他にも調査していた時に会った妖怪達も居るみたい。

でも、皆怪我してるみたい。

「イブキ、どうだ？」

「イブキさん、どうなんですか？」

炎鬼君に黄金ちゃんも来たみたい。

「問題ないわ、此処に向かって来ている妖怪達は、私が出ている間に会った妖怪達だから大丈夫よ。」

「イブキ、哨戒天狗から聞いたんだが、鬼が来ているって本当か？」

「そうよ、雷鬼君率いる鬼一族よ。でも前に会った時より人数が少ないような気がするわ」

「そうか…」

炎鬼君はそう呟くと考え込んでしまったみたい。

「イブキさん、これってどういう事なんですかね。基本的妖怪は生まれた土地からはあまり離れようとはしないんですけどね。」

「あの子達に直接聞いてみない事には、分からないわ。」

黄金ちゃんの疑問も最もだと思う。

私や炎鬼君、黄金ちゃんみたいに一人でぶらぶらするなら分からない事もないけど、あんな団体で移動してくるのは少しおかしい。

「イブキ、俺達鬼は基本的には住処を離れようとはしない、それなのに今此処に向かってきていると言う事は十中八九何かあったと踏んでいいだろう」

「やっぱりそうなの？」

うすうす思っただけだけどそうなのかしら？

・
・
・
・
・

待つこと数分、雷鬼君、光幻ちゃん筆頭に現れた妖怪達、その体には大なり小なり怪我を負っている。

「雷鬼君、光幻ちゃんよく来たわね、って言いたいところだけど…一体何があったの？」

「それは後で話すさかい、今はこいつらを安全なところで休ませたってえな」

「俺からも頼む」

「ええ、分かったわ、黄金ちゃん治療が出来る子達を集めといて、炎鬼君はこの子達の案内よろしくね」

「分かりました」

「ああ、分かった」

黄金ちゃんと炎鬼君はそれぞれ動き出した。

黄金ちゃんは山の方に飛んで行って、炎鬼君は妖怪達を引き連れて奥へと歩いて行った。

・
・
・

「それで二人とも何があったの？」

私の疑問に二人して答えてくれた。

「人間どもにやられたんだ」

「そうなんや、あいつら奇怪な武器でわいらを攻撃してくるんや」

「それだけなら何で此処に来たの？二人の力なら人間なんて簡単に蹴散らせるじゃない」

「それだけじゃないんだ、奴等は俺達の住処を壊しやがったんだ。」

「で、新しい住処の当てがないっっちゃう事でイブキの処ところに来たちゅうわけや」

二人の大妖が居る場所を壊すなんて最近の人間は強くなったのかしら？

「そういう事情だったら私は歓迎するわ、だけど此処の人里の人間を襲ってはダメよ」

イブキさん、こればかりは許せないんだからね、メッ！

「ここでの決まり事なんだろう、あいつらにも言い聞かせておく」

「わいの方も後で話は通しとくさかい」

「この決まりを守れない様な子は私がお仕置きするんだからね！」

「イブキの仕置きは何だか怖く感じんな」

「それはわいも言えるわ」

そう言って笑う二人、もうそんなに笑うこと無いじゃない。

「ここに居たぞ！総員攻撃態勢！穢れを撃ち払え！！」

「「ッ！？」「」」

いきなり現れた数十人の武装した人達が私達に向けて銃を撃ってきた。

靈力を使った障壁を張って防いだけど、なんで銃があるのよ！？

ほんの100年前にはそんな物なんて無かったのに！？

「イブキ！こいつらや！わいらの住処を壊したんわ！」

凄い怒気を出しながら跳び上がった雷鬼君の手には雷で出来た槍が在った。

「これでもくらえや！！」

どの怒号と共に投げられた槍は、陣形を組んでいる人間達の中心に刺さって辺りに雷を振りまいて消えた。

その攻撃を受けて生き残ったのが三分の一ぐらい、それでも無傷なのはほんの5人ほど。

「俺達を襲ったんだ、それ相応の覚悟があるんだろう？」

「ぎゃああああああああ……」

光幻ちゃんは一瞬で一人の人間に近づいてその鋭い爪を振り、体を切り裂いた。

切り裂かれた人間は断末魔を上げて絶命した。

その後も生き残った人間達を翻弄する様に切り殺した光幻ちゃん。

そして誰一人として生き残った人間は居なくなった。

神楽 かぐら

種族 人間

性別 女

能力 霊力を扱う程度の能力

外見 髪は黒のショートカット、背は155cmぐらい。

胸は平均的なサイズ。

服装は普通の巫女服。

ユンの家系の5代目の巫女。巫女つおい。

人妖郷の守護者、4代目から能力、霊力を扱う程度の能力が付き霊力の扱いに関してはマスタークラス。

椿 つばき

種族 烏天狗（妖怪）

性別 女

能力 風を操る程度の能力

少しヘタレやすい哨戒天狗。

光幻達が近づいて来るのを見て、人妖郷もおおしまいだ〜！と思
いながらイブキのところまで全力で飛んできた。

「イブキ様の作るお菓子は大好物です！」

第十八話 崩壊は唐突に…（後書き）

更新ペースは遅いですけど、生暖かい目で見守ってください。
誤字、脱字、感想があれば気軽にどうぞ。
まで、次回！

第十九話 作戦会議（前書き）

ううう、ネタが浮かばない・・・
最新話どぞ

第十九話 作戦会議

「今日皆に集まって貰ったのは、説明したとおり外の人間に対する対応をどうするか？という理由で集まって貰ったんだけど、意見はあるかしら？」

私達が居る所は人里と私達の住処の丁度中間にある決闘場。

それでここに集まっているのは人里の責任者と実力者数名に神楽ちゃん、後は光幻ちゃんに雷鬼君、天魔君に人妖郷の古参数人に炎鬼君と黄金ちゃん、そして私で円陣を作って話し合いをしている。

「俺は此方から討って出て人間共を殺し尽くせばいい、俺はそう思っている」

「わいもその意見に賛成や。わいらとイブキんとこの大妖怪達で攻めれば簡単に人間共を殺し尽くせるやろ」

光幻ちゃんと雷鬼君は物騒な事を言っているけど仕方がない事よね。「その意見には私は反対だ。人間達を殺し尽くすなんてめんどくさい、イブキさんだってそれを望んでない」

「俺も黄金の意見に賛成だ。ここの人間達よりは遥かに弱いだろうが如何せん数が多すぎる」

黄金ちゃんと炎鬼君は殺す事には肯定的なのね。

「俺はそこまで外の人間を殺さなくても、と思う」

「なんだと！」

「なんやと！」

「二人とも待てなさい」

「「ぬう…」」

「天魔君、どうしてそう思ったの」

天魔君に食って掛かろうとした二人を止めて天魔君に先を施す。

「話を聞く限り、その人間達は中級妖怪ぐらいだったら簡単に殺すような武器を持っているそうじゃないか、ならばその武器を作っている所か武器を使い物になくすればいいじゃないのか？そしたら外

の人間達はそうそうに俺達を襲ってくる事もないだろう」

「だがその途中にここが襲われたらどうするんだ？」

「その時は降り掛かる火の粉は払えばいい。そう、完膚なきまでな」
そこで天魔君が顔に邪悪な笑みを浮かべながらそう答えた。

「なあ天狗、わいらに人間相手に後手に回れとゆうんかいな。それじゃあわいらの腹の虫が治まらん、そこをどおするんや？」

「あの、イブキ様いいですか？」

挙手して声を上げた神楽ちゃん、そんな神楽ちゃんに皆の視線が集中する。

「いいわよ、何かしら」

「私達人の意見から言いますと人妖郷（こ）の平穏を乱す様なら人だろうが妖だろうが容赦なんてしなくてもいいと思います。最悪こちらから討って出て私達と敵対する者は排除すればいい話です。それとこれは私達の総意です」

「なんや話が解る人間やないか」

「人間だから俺達の言う事に反対すると思っていたが、この人間は話が解る」

「神楽です、そう呼んでください。光幻様、雷鬼様」

光幻ちゃんと雷鬼君の神楽ちゃん達への警戒が緩くなったのがわかる。

「えーと、それじゃ皆の意見を纏めると襲われたら撃退して、必要があれば私達を襲う気が起こらない程度に痛めつけるって事でいいわよね。」

「「「「はい！」「」「」」」

「「「ああ」「」」」

「それでいい」

予想以上に早く意見が纏まって良かったわ。

「さてと、方針も決まったから続いて作戦も立てましようか。皆いいかしら？」

皆頷く事で答えてくれた。

「まずは天魔君」

「おう」

「天魔君は今まで通り、この里の警戒をお願いね」

「解った、部下共にも伝えておく」

「炎鬼君、黄金ちゃん、雷鬼君、光幻ちゃんは東西南北に分かれて警備をお願い」

「はい」

「「ああ」」

「おう」

「そして私と神楽ちゃんは外に出て要所の偵察と、可能であれば壊してくるわ。いいかしら神楽ちゃん？」

「大丈夫です！イブキ様に付いて行きます！」

「で、残った子達だけど警備の手伝いをお願い」

「「「はい！」」」」

「それじゃあ、解散」

解散を伝えると皆思うことがあるみたいでそれぞれ帰って行ったわね。

はあ、これからが大変ね。

第十九話 作戦会議（後書き）

戦争フラグ立ちました

第二十話 それぞれの戦い（前書き）

やっつけ感が否めない
それでは、どうぞ

第二十話 それぞれの戦い

皆との話し合いから一週間経った今日。

私と神楽ちゃんは人妖郷から近い場所に偵察に向かっているわ。

「イブキ様、雰囲気が変わりましたね」

「そうね、自然が少なくなってきたわね」

神楽ちゃんの言ったように雰囲気は変わってきたわね。

辺りの木は刈り取られて殆ど無くなっているし、遠くの方の一部の地面は舗装されているわね。

百年前はこんなじゃなかったのに、この百年で一体何があったのかしら？

疑問を抱えつつも歩みを進めていく。

一番近い村？町？の近くに着いたけど……。

「イブキ様、これは一体……」

「多分、町だと思うわ……」

けど、金属の壁がぐるりと町を囲って、そしてその上に透明なドーム型の膜みたいなのが付いているわ。

どこの要塞よ！これは！

というより、どれだけ時代が進んでるのよ……

「神楽ちゃん、何が起こるか分からないから何時でも靈力で守れるようにしといてね。私も妖怪だとばれないようにするから」

「分かりました、イブキ様」

神楽ちゃんに注意も済んだし、この要塞に近づいてみましょうか。

“ビー！ビー！穢れを確認しました、直ちに迎撃を開始します”

「「ッ！？」」

入り口みたいな物の近くに行くと警告音が鳴って銃口が出てきて私達に向けて弾丸が吐き出されてきた。

「神楽ちゃん！防御障壁！」

「はい！障壁四重！」

向かってきた弾丸は神楽ちゃんの障壁で全て防がれているわ。

神楽ちゃんも余裕が出て来たのか話し掛けて来たわ。

「イブキ様、これは私達の事がバレたんじゃないんですか」

「まだ、バレてないと思うわ。恐らくこれは自動防衛じゃないのかしら？」

でもこのまま弾丸の雨に晒されるのも、なんだから壊しましょうか。

「神楽ちゃん、もう少し耐えててね。アレを壊すから」

「はい、分かりました」

一つの霊力弾を出して狙い定めて撃つ！

「目標をセンターに入れて発射、そして倍々ゲームよ」

一つを二つに、二つを四つに……って感じに増やして全部壊すことに成功したわ。

「流石です、イブキ様。それでどうします？私はイラッとききましたし、人妖郷から近いですし潰しておきますか？」

いきなりあんな事をするような物を置いた子達にはお仕置きが必要だわ。

それに憂いはない方がいいわよね。

「そうね。潰しておきましょうか」

「ふふ、腕がなります」

「神楽ちゃん程ほどにね。生かさず殺さずぐらいまでよ?」

「分かってますよ」

神楽ちゃんと話しながら入り口の前まで移動して二人して一気に入り口の扉を吹き飛ばしたわ。

「何だ!? お前たちは!?!」

「巫女と」

「ただのお菓子屋さんよ」

近くに居た武装した兵士みたいなのに答えると同時に霊力球を作って吹き飛ばす。

それからは向かってくる兵士を神楽ちゃんと二人で千切っては投げ千切っては投げて感じに無双してたわ。

もちろん誰一人として殺したりしてないわよ。

「イブキ様、こいつ等全然強くないですね。」

「そうね、強いのは武器が強いみたいね。」

本当に時代がどれだけ進んでるのよ。

「ここは片付いたし、あとはこの武器を全部壊しときましょうか」

「そうですね、私達ぐらいの実力がないとこれには対処できません」

ね」

それから私達は武器庫を探し出して、扱いが比較的簡単な物を拝借してから武器を壊しつくした。

そしてその武器を持って人妖郷にとんぼ返りして、皆に武器の使い方とその危険性について説明をして、また人妖郷を出て次の町に向かったわ。



side ????

「どうしてこうなってしまったの？私はただ皆に喜んで貰いたくて、色んな道具を作ってきただけなのに……」

私は皆から天才と呼ばれ、初めは小さかったこの町を大都市に発展させた。

ここには強力な時間操作系の能力者が居たからこそ、この百年そこでここまで文明が発展できた。

だけどそれが問題だった。

皆はより快適に、より安全にと危険な妖怪達を狩り出した。

そして時間が経つにつれて無害な妖怪まで狩り出し、妖怪を殺す快楽を求めるようになった。

初めは私も兵器開発を指揮してたけど、都市の周りが安全になった時点で必要以上の兵器は要らないと主張したら兵器開発から外され、開発に関われないようにか都市の外れに一軒の家を与えられそこに住んでいる。

そして今、妖怪が住む地域を基点にゆっくりと町が何者かに襲われている、という噂が流れてきている。

これは妖怪達の反撃なんだと私は思う。

「どうして、どうしてこんな事になってしまったの……」

“バキヤツ!”

玄関の方から破壊音と大勢の足音が私の居るところに向かって来ている。

「八意永琳!一緒に来て貰おうか!」

武装した兵士が数名にこの都市の最高権力者私にそう言ってきた。

「私はもう、お払い箱じゃなかったのかしら?」

「貴様にはやって貰わなければならない事がある！この穢れた地を捨て穢れ無き月へと渡る乗り物作ってもらおうか！」

「それで私が断ったらどうするの？」

ニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべている。

「貴様に拒否権はない、おい！」

兵士が何人か外に出て行った、そして顔に袋を被せられ手足を縛られた男女を連れてきた。

「その人達がどうしたの？」

「こいつらの顔を見てまだ断ろうとするか？」

そう言って二人の袋が取られた、そこには……

「とう…さん？……かあさ…ん？」

口を塞がれた父さんと母さんがいた、父さんと母さんの顔には暴行を受けたような跡がある。

「貴様が断れば、こいつらの命は無い」

この外道！それでもこの都市の権力者か！

憎悪の籠った眼で睨みつけるが、まるで効いてない。

「分かったわ、貴方に従うわ。その代わり父さんと母さんの安全は

約束して」

「貴様さえ協力すればこいつらに用はない、放してやれ」

「はっ！」

「八意永琳、着いて来い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私はただ無言で着いて行く事しか出来なかった。

ごめんなさい、父さん、母さん

第二十一話 戦争準備（前書き）

久しぶりに早く上げる事が出来ました。
では、どうぞ。

第二十一話 戦争準備

人間と私達の戦いが激化し始めた今日この頃、私は神楽ちゃんを人妖郷に残して一人で一番大きい都市に来ている。

そろそろこの戦いを終わらせないといけないわね。

少しずつだけど私達が押され始めているのだから……

誰にも気付かれないうに強力な隠匿術使って都市に入って、今は研究施設の中を歩いている。

これってオーバーテクノロジーもいい所よね、扉だって全部機械仕掛けになっているし、私達を殺せる強力な兵器まで作れるようになってるみたいだし。

思考しつつ奥へ奥へと進み続けて行くと怪しい部屋の前に辿り着いた。

私は躊躇することなく、その部屋に入ってみた。

中には沢山のモニターに武器の設計図が表示されていて、それで扱いがよく分からない機会が置いてあった、そしてこの部屋に一人だけ人間が居たわ。

その子は長い銀髪の少女で何もかも諦めた顔をしているようだよわ。

私は外から人間がこの部屋に入って来れない様に防音、認識阻害、

障壁、各種様々な結界を張って隠匿術を解いた。

「?.....誰?」

「貴方達が倒そうとしている妖怪の親玉って言えば分かるかしら?」

「そう、それでその親玉が私に何か用かしら?」

動揺もせずに素っ気なく返されてしまったわね。

「貴女は見たところ武器とかの設計者みたいだけど、単刀直入に言うわ、今すぐに武器の設計と製造を止めなさい」

「.....それは私には出来ないわ。止めたくても止めれない。.....どうしても止めたかったら私を殺す事ね」

何もかも諦めた悲しそうな事を言ってくれたこの子は何なんだろう。

何かあったのかしら?

「貴方名前は?」

「八意永琳」

「そう、永琳ちゃんね。永琳ちゃんは他の人間に弱みでも握られて無理矢理これをやらされているのかしら?」

「.....」

「沈黙は肯定と取るわよ。それなら私のやる事は唯一つこの施設を

壊すだけよ。だから永琳ちゃん此処から逃げなさい、じゃないと巻き込んでしまうわよ？」

「……どうして私を逃がすの？私を殺した方が手っ取り早いじゃない」

「永琳ちゃんみたいな子は絶対に幸せにならずにちゃダメなんだから、今は辛くても幸せは必ずやってくるものよ」

「貴女は変な妖怪ね。私のような人間を殺さずに説教するなんて、そうね少し考えてみるわ。」

少し憑き物が落ちたような顔をして永琳ちゃんは扉に歩いていく。

「ああ、そうだったわ。私貴方の名前教えて貰ってないわね」

「イブキよ」

「イブキね、最後に教えてあげる。近いうち私達の三分の一が月に移住するわ、それで残った者達は地上を賭けて貴方達と全面戦争を起こす可能性があるわ。それじゃあ、イブキ」

最後に重要な事を教えてくれた永琳ちゃんはこの部屋を出て行った。

永琳ちゃんがこの施設を抜け出したであろう時間になって私は破壊活動を始めた。



「と、言う事があったのよ」

「その永琳って奴が本当の事を言っていたとして、イブキお前はど
うするんだ？」

あれから人妖郷に帰ってきて皆を集めて早速対策会議を開いたわ。

「そうね、私達の生き残りを賭けて全面戦争をするしかないわ」

「そうだろう、あの忌々しい人間共に俺達の力を見せてやろう！」

「わいも賛成や！ただつえ武器を持ったぐらいでいい気になりおっ
て！」

光幻ちゃんと雷鬼君は妖気を体に滾らせてそう宣言したわ。

「全面戦争をするに当たって人里の皆には地下に避難して貰いたい
のよ」

「イブキ様！何を言ってるんですか！私達も戦います！」

私の発言に反対なのか神楽ちゃんが反対してきた。

「あのね神楽ちゃん、私は神楽ちゃんが生まれる前からこの人里を

ずっと見てきたのよ」

「それは、分かっています」

「だからこそ、私の気持ちを分かって貰いたい。私はこの里の人間が好きだから、だからこそ皆には死んでほしくないの。だから、ね。」

神楽ちゃんを壊れ物を扱うように優しく抱きしめて頭を撫で言い聞かせるように話した。

「…………分かりました、イブキ様。約束してください、必ず生きて帰ってきてください」

「ふふ、神楽ちゃん私達は絶対に負けないわ。ね、皆」

「「「「はい！（おう！）（ああ！）」」「」」「」」

「それじゃ、黄金ちゃん土系統の妖怪の皆に、地下に人里の皆が暮らせる空間を大至急創って貰って」

「分かりました。それでは行って来ます」

そう言って黄金ちゃんは此处を離れて行ったわ。

「神楽ちゃんも人里の人達にこの事を伝えてきてね」

「はい」

神楽ちゃんも此处を離れて、残っているのは私に炎鬼君、光幻ちゃ

ん、雷鬼君、天魔君の五人で話を進めていくわ。

「戦争をするに当たってだけど、基本的には防衛戦になるわね。皆いいわね？」

皆が頷くのを見てから話を進める。

「それで戦力なんだけど、私達大妖怪級と中級妖怪の編成部隊での防衛戦を想定しているわ。弱小妖怪に関しては、人里の皆と地下に避難して貰う事を考えているわ。何か意見はあるかしら？」

「俺は特にない、お前らはどうなんだ？」

炎鬼君が代表するように答えて他の皆に話を振ってくれたわ。

皆は意見がないみたいで首を横に振って否定しているわね。

「このやり方で決定ね、それじゃ皆、解散」

第二十二話 地底住居区完成（前書き）

うゝむ、短い
ではどうぞ。

第二十二話 地底住居区完成

「イブキ様！地下移住区が完成しました。」

あら、早いよね。

この計画を出してからまだ三日目なんだけど、皆仕事が早過ぎるわね。

「ご苦労様、それにしても随分と早く終わったわね」

「はい！イブキ様の期待に応えられるよう、皆頑張りましたから」

「それじゃあ、そこまで案内してもらえるかしら？」

「はい、こちらです。イブキ様」

・ ・ ・ ・ ・

土竜妖怪のコモリちゃんに着いて行って、地底深く下りたった場所は広大な開けた空間が出来上がっていたわ。

こんな短期間でよくもまあ出来たものね。

今は、ほぼ何もないから寂しいものね。

在るのは鬼火が灯った石灯籠が一定間隔で置かれているだけね。

「どうですかイブキ様、これぐらい広ければ大丈夫ですか？」

「ええ、問題ないわよ。こんな短期間で良くやってくれたわ、ありがとうコモリちゃん」

「イブキ様にそう言って貰えて光栄です」

「コモリちゃんは皆に移住の準備を伝えてきて、あと弱い妖怪や戦いたくない子達にも、この事を伝えておいてね」

「わかりました、行って来ます」

コモリちゃんは地上に向けて走り去って行ったわ。

さてと、私も頑張らましようかね。

「黄金ちゃんいる？」

「はい、ここに」

スッ、と私の後ろから現れた黄金ちゃんに、私の懷から出した数十枚のお札を渡した。

「これを里の民家に全部貼ってきて貰いたいのだけどいいかしら？」

「喜んでお受けします、それでは私も行ってきます」

ヒュッ、と目にも留まらない速さで黄金ちゃんが去って行ったわ。

何時の間にそんな事が出来るようになったの黄金ちゃん：

そして数分もしない内に黄金ちゃんが帰ってきたわ。

「吃驚するぐらい速いわね」

「そんな事ありませんよ。あ、イブキさん余ったお札です」

「ありがとう」

黄金ちゃんからお札を受け取り、それを懷にしまって新しいお札を取り出した。

「イブキさん、そのお札で何をするんですか？」

「こうするのよ」

お札を額に付けて、意識を集中し黄金ちゃんが貼ってきたお札から、その家の構造を把握して能力でここに複製していく。

「こういう事でしたか、流石ですイブキさん」

「ふふ、一気にいくわよ。」

一時的に思考を複製して貼ってきたお札全部に意識を集中して、さつきと同じ要領で複製していく。

全部複製した頃には、心地いい位の妖力の喪失感を感じることが出来たわ。

「イブキさん終わりましたか？」

「んー、終わったわよ。それじゃ、黄金ちゃん地上^{うえ}に戻りましょうか」

「はい」

・
・
・
・
・
・
・
・
地下移住区が完成して、一週間経った日に焰華にある話をしているのよ。

「やだ！ 私もお母さんとお父さんと一緒に残る！」

「お願いだからわがまま言わないで焰華」

焰華に戦争が終わるまで地下にいる様に話して、かれこれ一時間ぐらいこのやり取りを繰り返しているわ。

「やだやだやだ！お母さんたちと離れたくない！」

「焰華……」

可愛い一人娘を失いたくないから、地下にいる様に言ってるのに何で分かってくれないの？

「イブキ、俺に任せてくれ」

「炎鬼君……」

私の肩に手を置いてそう言ってくれた炎鬼君に焰華の事を任せる事にしたわ。

「焰華、お父さんと少し話そうか」

「お父さん！私離れたくないよ！」

「そうだな、お父さんも焰華と離れたくはない。もちろん、イブキ……お母さんだって焰華と離れたくないんだ」

「じゃあなんで、地下にいろなんて言うの！」

「それはな、この戦いで俺達妖怪が奴らに勝てるという保証はない。だから焰華は安全な地下でお父さん達の帰りを待っていてくれないか？」

「本当？本当にお父さんやお母さんは帰ってくるの？」

「ああ、本当だ。お父さんとお母さんは嘘は付かない」

「じゃあ地下で待ってる」

「いい子だ、焰華」

すごい、私があれば言っても聞かなかった焰華の説得に成功したわ。

「イブキ、焰華の事は神楽に任せればいいか？」

「そうね、神楽ちゃんなら良くしてくれるわね。お願いしましょうか」

そして、焰華を神楽ちゃんに預けて数日後には戦争が激化するとは、この時の私は知る余地もなかった。

第二十二話 地底住居区完成（後書き）

やっと終わって次のステップにいけそうです。

第二十三話 戦争の終わり（前書き）

グロ注意、黒イブキ降臨のお知らせ
では、お楽しみください

第二十三話 戦争の終わり

「イブキ様！また奴らが攻めてきました！」

「分かったわ、私が出るわ。それと動ける子は前線へ」

「はい、皆に伝えてきます」

ここ数日で人間達が、攻めてくる頻度が激しくなっているわ。

そして、今も攻めてきた人間達を撃退する為に、私も前線に急いで向かっているわ。

・ ・ ・ ・ ・

「おおおおお！増援はまだか！」

傷ついた子達を守っている光幻ちゃんの姿が見えてきた。

「光幻ちゃん！下がきなさい！」

妖力による砲撃で、光幻ちゃんに向かっていた人間達を消し飛ばして、光幻ちゃんを助ける事に成功したわ。

「ぐっ、すまない、イブキ」

光幻ちゃんを含め、傷ついた子達は沢山いる。

もう、許さないわよ……人間。

「いいのよ、光幻ちゃん。後は、私がやるから光幻ちゃんは、皆を連れて下がりなさい」

「そうさせてもらう。……イブキ、死ぬなよ」

「私は死なないわよ」

そう答えて、奴らを見据える。

「最大級の穢れが現れたぞ！」

「アレを浄化すれば、我等の勝利は揺るがない！」

「装備を変えろ！穢れを浄化する！」

[illegible]

数の暴力とも言えそうな位の光線が私の向かってくる。

こんな物で私をどうにか出来るつもりなのかしら？

「障壁」

妖力で障壁を張って、今まで抑えていた妖力を開放する。

妖力を開放したら周りからジュージュと焼けるような音が聞こえ

てきたわ。

「あれが奴の本気なのか？」

「まさか、これ程とは……」

妖力を開放した途端、目に見えてアイツ等は怯え始めたいる。

「貴方達がいけないのよ。月に行った連中と一緒に行けば良かったものを……」

一歩、奴らに向けて踏み出し、だんだんと近づいていく。

更に、奴らの恐怖心や不安感を複製する、そうするとどうなるかしら？

「ひいひいひい！」

「た、助けてくれ！」

「来るな！来るなああああ！」

奴らの取り乱しようには、笑いが込み上げて来そうだわ。

「それを地上に残って私達妖怪を滅ぼそうとするから……」

もう手の届く範囲に一人目がいる。

「あ……あああ……あああああ」

失禁までして情けないわね。

「こうなるの、よ！」

肩と二の腕を掴んで、ブチブチと嫌な音をたてて引き千切った。

「ぎゃあああああああああ！」

更に反対側の腕を掴んで、また引き千切る。

「あ・・・ああ・・・ああ・・・ああ・・・あ・・・」

「まだ、生きてるわね？次は足よ」

引き千切るのは面倒ね、踏み潰しましょうか。

グジャ、グシャと両足とも胴体から離して、人間ダルマの完成ね。

首を持って目の高さまで持ち上げて奴らに見えるようにする。

「ヒュー……ヒュー……」

「貴方達の末路はこうよ」

手に力を入れて首を握りつぶし、落ちた頭は踏み潰した。

「あはははははは！皆、皆！殺してあげるわ！」

これが私の本能なのね！なんて気持ちがいいのかしら！

「ああああ！」

「あら？自害なんて許さないわよ」

銃で自害をしようとした人間の腕をもぎ取って、自害を阻止した。

「！？がああああ！！」

「あはははははははははは！！あの子達の痛みはこんなものじゃないのよ！人間！！」



イブキが狂った様に笑いながら人間を殺していく。

地面に叩きつけ粉碎し、踏み潰し、引き千切り、弾幕によって消し飛ばす。

そして数百と居た兵士も、今じゃ片手で数えられる程度にまでなっている。

「あははははははは！アナタで最後のようね、人間！」

最後になった兵士の首を持って、ギリギリと締め上げる。

そうしてイブキが兵を締め上げていると兵士から、警告音みたいな音が鳴り始めた。

「…ゴア、われ・・・わ・れの・・・勝ち・・・だ・・・よ
う・・・か・・・い」

その兵士がそう言って、数秒もしない内に人妖郷の至るところは轟音と光に包まれた。

無論イブキのいたところも例外なく……



「うっ・・・あ・・・つく」

気を失っていたみたいね、それに体中が痛い、何が起こったの？

確か最後の人間を殺そうとして、人間からピーピー音が鳴って、それから轟音と光がきて、そこから記憶がない。

鈍っていた意識が鮮明になってくる、周りを見れば辺り一面焼け野原になっている。

焼け野原、轟音、光……爆撃！？

素早く立ち上がり、痛む体なんて気に留めなくて人妖郷の中心に向けて走っていく。

皆！無事でいて！

第二十三話 戦争の終わり（後書き）

後一話ぐらい挟んだら、この古代がやっと終わりそうです。
長かった、長かったぞ！
それでは、待て次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6529q/>

東方菓子伝

2011年8月20日00時21分発行